

講演

# 日本人の救済観と死生観

## —近代から現代へ—

島 蘭 進

目 次

- はじめに—死生観への関心
- I. 戦後日本と現世主義
- II. 現世主義的な宗教性
- III. 死者との親しみ
- IV. 死と向き合う孤独な個人
- おわりに

キーワード：救済観、死生観、現世主義、新宗教、孤独

### はじめに—死生観への関心

皆さん今日は。こういう機会をいただいて本当に嬉しく思っております。実はこの講演会へ今日、機会をいただいたのは道徳科学研究センターの研究スタッフである鈴木康之さんと40年の長い付き合いがあるからです。

私は宗教学という学問をやっておりますが、特定の宗教と実はあまり関係がないんです。私の指導をしてくださった先生のお一人に脇本平也先生という方がおられまして、この方は浄土真宗の在家の父上をお持ちで、たくさんのことを教えていただきました。教えていただい

たことの一つは、お焼香をする時には三回もやるなよということ。一回ほーっと落しながら、その間に「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と言えばいいんだと。これを私は真似しているんですが、そういうようなことを教えてくださった先生です。その先生は宗教学を学ぶというのは、要するに宗教が好きだということで、私は宗教についてはこれだ、これでなきゃいけない、というのがないですね。ですから、「いや、この宗教はこうだ、あの宗教はああだ」と言っておりますので、何か評論家的だなということで、しっかりとした信仰を持っている方から見ると、いい加減な奴だと思われがちで、ずうっとコンプレックスを持ちながら研究をしておりました。

そういう所におりまして宗教学というのをやっていましたが、段々、「死生学」というものが起こってきて、世間のほうでそういう学問をやるんじゃないかという気運が高まってきました。宗教学をやっているのなら死生学もできるだろうということでですね、文科省の資金による COE の特別研究チームのリーダーに任じられ、まあやってみようかということになりました。死生学は医療と深い関わりがあります。私は父親が医者をやっておりましたので、そういう関係からも医療と文化の関係というようなことに近いところにいたと言えるかもしれません。

宗教学研究者として、私が宗教を見る時には「救済」という観点に注目してきました。しかし自分は救済されなきゃならない人間だと分かっている、救済される人間だとは決して思えないというか、そういうことで、「救済」ということにはどうしても距離があるという、そういうものとして宗教を見ていました。

しかし「死生観」となるとですね、これはやっぱり「自分の死生観」がないというのは何か寂しい。世の流れとともに、死生観の話を お前ちょっとやってみろと言われて、少し先輩の方々に前にして日本人の死生観という話をしますと、皆、お前なんかに分かるかというふうに見ていらっしやる。やはり死が近づいてきて、初めてそういう話

ができる。そういうことなので、最初はそれに取り組んだ時は、やや心もとない気持ちでしたが、やっているうちにやっぱり自分のこととして研究できると感じられてくる。そういうことで死生観というのに取り組むことに喜びを覚えるようになりました。そういうことを今、やっておりますので、そのへんのお話をしたいと思います。

「死生観」という言葉は、日本人にとってはある程度親しみがあります。これはしかし、韓国とか中国へ行くと使いません。「生死観」といっている。「しょうじかん」とか「せいしかん」ということです。今、中国ではそろそろそういう領域が芽生えつつある。韓国はもうちょっと早い感じです。どうしてなんだろうと。実は「死生」というのは『論語』に出てきます。「生死（せいし）あるいは「生死（しょうじ）」というのは、仏教の根本用語です。日本は韓国・中国と比べると、仏教が庶民の生活に浸透している度合いが大きいので、日本でこそ「生死（しょうじ）観」という言葉が広まっていいと思われるわけですが、どういうわけか今、我々は「死生観」という言葉を比較的、馴染み深く使っております。

どうしてそうなったかと言うと、スライドで紹介してあります加藤咄堂という人が、1904年に『死生観』という本を書きました。どうもそれが大きく影響しているようです。この加藤咄堂というのはどういう人かと言いますと、京都府亀岡のかなり有力な武家の出身で、1870年生まれですから、この廣池学園と深い関係があります廣池千九郎(1867～1913)と3歳違いということになりましょうか、そういう方です。実は廣池千九郎と加藤咄堂は並行関係があると、今回準備しながら気が付きました。

というのは当時は、豊かな学問的素養がある人が、その学問にふさわしい社会的地位というのを見つけにくかった時代です。それは学校制度、高等教育制度というのが整っていないからで、江戸時代流の勉強の仕方、学問の仕方があって、そこから明治の体制へ転換していくその狭間に行き当たってしまったと、まあそういうことだと思いま



す。士族は没落しました。加藤咄堂のお父さんはやっぱり士族の商法のようなことをやって失敗した。ですので、この人は帝大に入るような力があつた人だと思いますが、そうじゃなくて私的な学校で勉強した。しかし良くできる。もちろん漢学ができるし、仏典もよく読めるし、英語もできる。そういう人でありました。

しかしそういう知的能力を活かす場がない。それで東京へ出て来まして、築地の本願寺に雇ってもらった。仏教の方は当時は今よりも力があつた。しかも知識人のかなりの部分は仏教教団が抱えていた時代ですね。知的伝統を持っていた。学問はあるけれども貧しい人は、僧侶になることによって学問の力を伸ばす。これは長い伝統があります。

しかし近代になると、漢学も洋学も知っていて、仏教も分かるというような人が必要になってきます。そして加藤さんは本願寺に招かれまして、仏教解説書のようなものを書くようになりました。そしてそれだけではなくて、一般人向けに、通俗修養講話の本を出すようになりました。

明治のある時期から「修養」という言葉が広まってまいります。こ



これはまあ江戸時代からあった人間の育ち方、人間形成の在り方から、明治になったからといって簡単に西洋風のものにさっと移るわけにはいかない。そこで修養道徳主義のようなものが広まってまいりました。これはモラロジーの形成とも深く関わっていると思います。

そしてこの加藤さんは、最初は仏教の本からそういうことを始めましたが、あらゆる分野の知識を取り込んで、やがて国民道徳というふうになってきますが、日本の国民のために道徳、生き方の教を説く講演者として大成功し、重用されました。政府からも尊ばれた。多い時は年に何百日と講演をして歩いたという、そういうふうな人ですね。その人が若い時に、34歳で、こういう本を書いた。

この時期というのは、つまり1904年というのは、とても面白い。日露戦争の始まる時期ですね。それからこの本の中でですね、後で出てきますが、「死生観」という言葉を彼が思いついたのは大発明だと思います。この後に彼は「女性観」という言葉も出していきます。もちろん「人生観」というような言葉も当時あったわけですが。この死生観という言葉を出すについては、当時「死」ということが新しい形で問題になっていたということがあります。

それから死生問題という言葉ですが、問題という言葉がよく使われるようになった。社会問題とか人生問題とかですね。今、我々はふつうに人生問題とか社会問題と言います。そういう言葉がこの頃から使われるようになった。

「死生問題」という言葉を使った有名な人には、清沢満之という人がいます。この人は浄土真宗の伝統にありながら、西洋哲学の超一級の学者でしたね。非常に若くして亡くなりましたけれども。しかし帝大の哲学教授になれるぐらいの実力がありながら、宗門のために、宗門からお金をもらって帝大へ行ったので、宗門のために身を捧げた。そして素晴らしい日本の宗教哲学の基礎をつくった人です。

彼も「精神主義」という文章を書いている時に、死生問題というようなことを言っております。当時、内村鑑三のような人も一般の若者向けに、キリスト教を思想として説く。人間としての生き方を問う。あるいは死というものに向き合う人間のあり方を問う。そういう近代の知識人が成立してくるんですね。同じ頃、一高生だった藤村操という人は、「人生不可解なり」と書き残して自殺しました。煩悶といって、何だかよく分からないけれども、この人間の生とは何かということに苦しんでいるというのです。そういうことで華嚴の滝で身を投げたという、そういう時代ですね。

その時期にこういう本を書いた。ご覧のような目次なんです。『古聖』というのは、孔子、老荘ですね、あるいはイエス、仏陀等々ですね。つまり世界の聖人たちの死生観。近世というのはこれは近代哲学、西洋哲学の死生観。あるいは科学も入ってまいります。

こういうふうに近代科学というものの知識が入ってきた。そして西洋の哲学についても皆、議論ができるようになってきた。そして東洋の伝統というのをそういう目で見直す。ですから世界の諸思想を比較するような思考法が日本人に入ってくるんですね。ほぼ同じ時期に新渡戸稲造は『武士道』という本を書きました。「武士道」という言葉が広がるのはこの時期ですね。

## ◇死生問題とは？

- 「生あり死あり、其の間五十年、名けて人生と為す、人は唯だ此蜉蝣の如き生存を以て満足すべきか。上下茫茫数千歳、生ずるもの限りなく死するもの亦限りなし、生ずるもの必ず死して、死するもの必ず生ずるか、生ずるものゝ必ず死するはこれを目撃すべきも、死するものゝ生ずるは知り得べきの限りにあらず、此に於て死生の問題は永久の疑問として吾人の前に横はれり、吾人はこれを単なる疑問として放抛すべきか(『増補死生観』p.1)

加藤も武士道という言葉を使っています。ですから実は、この人は仏教の話もできるし、西洋哲学の話もできるし、キリスト教の話もできるんだけど、一番共鳴しているのは、武士の死生観ですね。

ですからそうしますと、江戸時代の儒学者で武士道系統の人。陽明学とかですね。そういうタイプの人の言葉が非常によく出てくることになるわけです。加藤咄堂熊一郎、本名ですね。『大乘仏教大綱』、こういうような本を出して、築地本願寺に雇ってもらっていて、死生観の本が出るとワーッと売れた。でするので比較的薄い本ですが、『増補死生観』というのを出したり、その次には『大死生観』というこんな分厚い本を出した。そういうものが売れた。

これがまあ日本の死生観というものの第一のブームということになるかと思います。こんな本になっております。目次、ちょっと遠くで見にくいと思いますが、大和民族の死生観ということで、やっぱり日本人の中に独自の死生観があるだろうと述べています。それが武士道のようなものに引き継がれてきている。こういうふうな考え方になります。

「死生問題とは、生あり死あり、其の間五十年、名けて人生と為す、





## ◇加藤が好んだ死生観

- 三界を了達するに心によつてあり、十二因縁復た然り、生死皆な心に由りて作す所、心若し滅すれば生死盡く(華嚴経)
- といひ、宇宙の実相を真如と生滅の二門に分ち、前者を以て不生不滅の本体とし其本体の上に生滅の波瀾を起すものを宇宙の現象とし、波を離れて水なく、水を離れて波なきが如く、生滅を以て本体海上の波なりとし、優に近世哲学の精華たる現象即實在論に入る(p.91)

うなものを組み入れようとした人たちと似ています。井上は「現象即實在論」というようなことを当時言っていたのですが、加藤もそれに類する用語も使って、仏教も儒教も西洋哲学の用語も混ぜながら、しかし基本的には、小さな自己が大いなるものに一体であるということを感じ取る。そうすれば死は恐れるに足りないというか、死ということはそんなにこだわるべきことではないという、そういうふうな死生観。これは確かに死を恐れない武士の死生観です。しかしその武士の背後には儒仏道、神儒仏共通のような世界観がある。東アジア的なそういう宇宙観と言っていいかもかもしれません。そういうものに近づいている。ですから共鳴を呼ぶのはある意味では当然であったかもしれないと、そういうふうに思います。

これが第一の死生観ブームで、少しそういう思想が当時広まった。新渡戸は何故、『武士道』という本を書いたかということ、「西洋人が持っている近代の道德観に対応するようなものは日本に何も無いんじゃないの」というふうに西洋人に聞かれた。それに対して、「いや武士道があるよ」と答えたわけです。自分自身の過去を振り返ったわけです。南部藩の武士の開拓者の魂を持った人です。そして本人はキリス

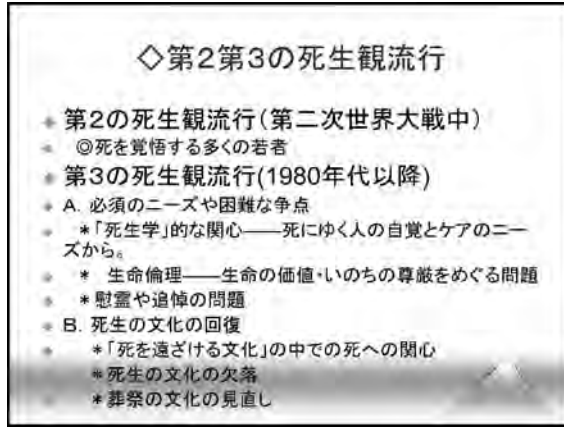
ト教に入ったんですけれども、しかし西洋流のキリスト教にそのまま溶け込むことはできない。クエーカーでした。クエーカーのキリスト教というのはまた、東洋風なところがあると思いますが。そういう中で彼は、武士道ということを出した。西洋社会に対抗できるような日本人の精神的基盤というものを武士道に求めた。そういうことですね。

ただそれはまた日露戦争の時代でもありました。ということは、たくさんの方が亡くなっていく。8万人ぐらいでしょうか、亡くなくなりました。死ということがすぐ身近にあふれている時代、時期ですね。近代社会はマスメディアの時代でもあり、社会全体のことがワーッと身近に感じられる時代です。国民というものを同じ一つの仲間のこととして感じる。その中で戦争とか災害というのは大きな出来事です。そういう中で死生観というのが意義深く感じられた。今あげてきたいくつかの意味でこの第一の死生観の流行というのは、日本の精神史で重要な時期です。

しかし第二の死生観の流行した時代は、またこれも大変な時代でありまして、要するに第二次世界大戦中です。これは言うまでもなく、死を覚悟する多くの若者が死生観という言葉に魅かれざるを得なかった時代ではなかろうかと、そういうふうに思います。

そして今、どうも1970年代のある時期からまた死生観というものが大きな反響を得るようになった。先ほど言いましたように、私自身も死生観という言葉に親しみを感じるし、我々の同僚や若者がそういうものに魅かれる理由が分かるわけですが。その理由を考えるには、その前の時期の死生観の流行ということも知っておいた方がいいんじゃないだろうかと思います。

今の死生観の場合、いろんなニーズがあります。まず病院で亡くなっていく人が圧倒的に増えた。しかし医療施設には死を迎えるための文化的リソースはほとんどない。お医者さんは体の特定部分を治すための訓練を徹底的に受けるけれども、そういう教育を受けていると、



死ということについて考える暇さえない。すごい詰め込みの教育ですね、医学部の教育は。看護師さんのほうが考えているけれども、しかし看護師さんも迷っている。しかも日本の病院というものはチャプレンというものがいない。そういう魂の問題に関わるようなことを患者さんは当然日々考えているわけですが、そのことに応じる体制がない。

西洋でも従来のように特定宗教のチャプレンが対応していた時期は終わった。どんな人に対しても、特に自分の宗教というものが無いような人に対しても応じる。そして特定の宗教色を持たない死を迎える施設が必要だということで、現代のホスピスというものが起こってきます。1960年代ですね。これが世界的な運動になって、今広がっている。

死を迎えるときだけではなくて、普段から病院というものに、もっと魂の問題、心の問題への取り組みが必要だということは感じますが、まずは死を迎えるところからやっ払いこうと、こういうことだと思っんですね。それと関わって、医療やケアを行っていくときさまざまな倫理問題にぶつかってしまう、難しい決断の場面にぶつかってしま

う。例えば、死が近づいた患者さんに対して、いつ治療を止めればいいのかといった問題にぶつかる。

後期高齢者医療制度はいろいろ問題がありますが、中でも厚労省の大失策の一つは、「あなたは人工呼吸器などを要らないと思いますか」というのを○×で付けなさいというふうにしたことですね。あまりにデリカシーがないです。しかしそういう問題について病院の方は実は本当に切実に感じています。10年前に亡くなった私の父なども「リビング・ウイル」を書いておりましたんですが、本人の意思表示があれば、医療側の対応はできます。しかしそういうことが日本の医療ケアの体制では全然なされていない。このへんはその他にも中絶の問題とか、今あらゆる問題が医療関係者には襲いかかってくるので、そういう問題にも答えなきゃならないですね。

お葬式やお墓というものもどんどん変わってしまっていて、今までのようなお葬式じゃちっとも慰められない。お通夜といっても何かあっさりし過ぎて、心が晴れない。また、何であなたの家のお墓に入らなきゃいけないのよという女性が増えてきた。私の息子なども、お墓参りに来てくれるかという、例えば海外に長いこと居ると、そんなことに馴染みがないです。そういうことで、今までの家のお墓をいつまでも続けていくということでもいいのかということが問題になってくる。国全体の集合的な問題でいえば、戦争の死者をどう弔うかということが大きな問題です。様々な問題があふれてきてしまう。それはいろんな学問分野が皆、協力して取り組むべきだということになります。これが死生学というものが、今、出てきている理由です。

こういう死生学関係の催しをしますと、一般市民もたくさんの方が来られます。例えば柳田邦男さんという方がおられますが、あの方は癌の治療とか、自分の息子さんの死、こういうことについて書いてこられた方です。私どもの会で講演に来ていただいたら、たくさんの方の聴衆が来られます。びっくりしたのは、柳田邦男さんに来ていただいた時に、本にサインをしてもらうんですね。若い10代の学生たちが、

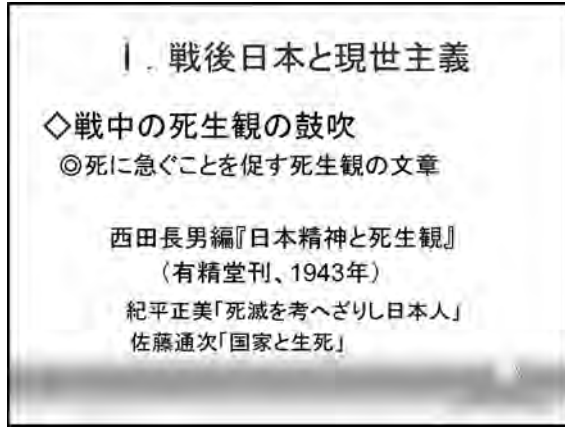
『犠牲（サクリファイス）』は、柳田さんの息子さんが20代で亡くなった、自殺したことについての本、その文庫本に若い人たちがサインをしてもらった。そのぐらい若い人たちにとっても死ということが重大な問題であり、死に向き合う智恵を求めているわけです。そういうことが死生の文化の回復ということが求められているということであろうと、そういうふう思うわけです。

## I. 戦後日本と現世主義

そこで話が戻りますが、死生観の第二のブームというのは戦中です。今から、例えば加藤咄堂の文章を見ると、それほどの違和感がない。あるいは1970年代以降に書かれた文章にそんなに違和感はない。しかし戦争中に書かれた死生観についての本は、やや異常な社会だ、異常な世界だったんだという印象を持たざるを得ない。やはりこれからもう自分の命はわずかしかないと信じている知的な若者たち、学問のある若者たちに向けてこういう本が書かれていたということです。

西田長男という方は大変立派な神道史の学者です。その方の編集で、紀平正美とか佐藤通次とか、哲学者、文学者、文学研究者、そういう人たちが執筆しています。こういう本が昭和18年に出ております。一つの例ですが、これは当時としても権威が高いものですし、ある意味では内容がある本ですね。例えば鈴木大拙もここに書いてあります。鈴木大拙は戦争中から戦後にかけて、「日本的靈性」ということを言います。これは神道中心の日本精神論に対して、日本人の精神については仏教がもっと大事なんじゃないか、ということを裏に秘めながら、大拙は日本人の生死観を論じています。彼は生死（しょうじ）観ですね。仏教だから生死（しょうじ）観の語を使うということです。ここにも生死（しょうじ）と死生と両方出てきます。

神道、仏教、軍人、哲学者、文学者、そういう人が書いておりま



す。紀平正美はこういうことを言っております。この方はヘーゲル研究者で、しかし東洋思想に詳しかったので、華嚴経の思想を西洋思想風に解釈したり、そういうものを日本精神というふうに言ったという人ですね。ですから精神的な系譜としては加藤咄堂とどこかつながっている人と言えるかもしれません。

このスライドに見られるようなことが説かれていた。確かにここで言われる日本人の死生観というものにはありそうな気もするけれども、何かしっくりしないものがあるなど、そういうふうにも思うわけですね。

そこでそういう時代に生きた人で、『戦中派の死生観』という本を書いた吉田満という人がいます。この人は『戦艦大和の最期』という本を書いたのでよく知られている人ですが。私の父親が大正9年生まれですが、この方は大正12年生まれですね。司馬遼太郎と同じです。三島由紀夫は14年生まれです。私の母親は13年生まれです。その頃なので、私の親の世代の人たち、その年代というのは2、3年違うだけで、非常に感じ方が違うらしいです。我々はその影響を受けてきたので、この世代の方たちの死に対する考え方というのは、身にしみると



ころがあるし、よく今からも学び直す必要があると思うのです。

吉田満は、富山県出身の実業家の父親の子供でしたが、大変秀才で東京高校という所で学んだ。そして東大法学部に入りまして、当時は学徒出陣ですので、大学に入った時からもういつ軍隊へ行かなきゃならないか分からないわけですね。本人は高校時代は軍事教練みたいな

◆ 紀平正美「死滅を考へざりし日本人」

「今日の大戦争に於て、第一線に活躍して居る日本人[が]、天皇に、国家に、其の生を拓して居ること、何れにおろかあるべしとは考へられないが、知識者には、死の意義を考へるなど、多少の迂路がとられるやうである。」

◆ 「然るに少年航空兵として訓練を受けたものには、幾多の美談佳話があるが、どうぞ死ぬるならば、其の「只今」を永恆ならしめんとして、更に大敵或は敵の巨漢に体當りの自爆をやるなどは、生死超越などいふ概念で取り扱はるべき性質のものではない、死を永恆ならしむるといふ、神代時代からの日本の考へ方をそのままに今に露呈したものに外ならない。則ち死滅を考へないのである。」(pp.26-7)

ものにあまり気が進まなかったんです。これは私の父のことも考えるのですが、中国と戦争をしている時代ですが、愛国的という感じは全然しない。それでうちの父なども医学部へ行くのですが、よく哲学の話をしたりしていました。うちの父親は実は武蔵高校という所に行っていました。旧制高校的な文化、教養主義的な文化の影響を受けて



いました。その少し前には白樺派という学習院の出身の人たちがいましたが、良家の子供たちがエリートの教育を受ける。そして一般世間のこととはちょっと離れたところで育てられている。そういう人たちは戦争ということについても簡単には乗っていかない。下からの盛り上がりはすごい。もう日本の国のために愛国心が盛り上がっているけれども、むしろそこからはみ出るようなところもある、そういう人たちがいたと思います。

しかしある時期に吉田満は海軍に行くことを決めて、死を覚悟したような気配があります。そして戦艦大和に乗りました。戦艦大和の最後というのは誠に悲しい物語でございまして、3000人か4000人ぐらいの人たちが乗っていたのです。瀬戸内海から沖縄戦援護のために行く。戦艦全体が特攻的な任務を得るわけです。つまり沖縄の海岸に横づけにして、米軍上陸を防ぎ、そして残った人員は玉砕戦に加わると、こういうことをやりました。

それは乗っている兵士にとってはとんでもない作戦です。特にインテリの士官たちは、その作戦がそもそも妥当であったかということは当時から疑いを持っていたので、何のためにこういうことをやらなきゃならないのかと若手の士官たちが議論した。俺達の死は何のためだということを鮮明に覚えていて、そして彼は生き残ったのです。その記録が書いてある。ほんの何百人しか生き残らなかった中に吉田満が入りました。

白淵大尉という人の皆を納得させる話が出てまいります。最後には死を覚悟して、この戦争そのものが、あるいはこの出陣そのものが何か深い意味があるとは言えないけれども、しかし私たちが死ぬことにはこの日本の発展のために大きな意味があるんだということを納得するわけです。そういうことを話し合いながら、しかしとにかく多くの若者が逝った。これは戦後文学の名作であります。しかし占領軍に発行停止になって、実際に刊行されたのは1952年です。書かれたのは1945年から46年にかけてで、46年に発表しようとしたんですが戦後検閲

ですね、進駐軍の検閲によって刊行されなかったのです。

そして吉田満は、その後、文学者になる道もあったでしょうが、日本銀行に入りまして、大蔵省日本銀行という、これは日本の経済を支えるエリートです。そういう戦後の日本の復興を支えるエリートとして生涯を送ります。亡くなったのが1979年です。この『戦中派の死生観』という本は、彼が最後に亡くなる前に口述筆記をした「戦中派の死生観」という文章を中心に彼の文章を集めている。56歳ぐらいで亡くなった人です。

この中で『戦艦大和の最期』で書いたことをもう一度、彼は振り返っています。この文章「死・愛・信仰」というのは、昭和23年頃に書かれたものです。この前後に彼はキリスト教徒になっております。最初カトリックになり、結婚した相手がプロテスタントだったので、プロテスタントになりますが、プロテスタントとして一生を送っています。それは彼が出陣する前から悩んでいた、そしてこういう問題を考え抜いた、その結論として、やっぱり神というところへ行っただけのことだと思います。「死・愛・信仰」にこういうことを言っていますね。「欺かれてはならない。あのようなものが死ではない」。つまり一度彼は戦艦大和で日本の国のために死ぬということ、納得したはずだった。しかしそれは本当の納得ではなかったというふうに後に思うということですね。「あのようなものが死ではない。死から十分にへだたり、生きることが平凡な確かさを持っているとき、そこにこそ死がある。死ぬか生きるかの刹那、あるのはただ肉体の、感覚の、動物の死のみだ、生きねばならぬ。正しく愛をきずいて、生きるにふさわしく生きねばならぬ」。これは一種の哲学で、このエロスということ、あるいは愛ということを高らかに謳っている。そういうものとして彼はキリスト教を受け入れたのだと思います。これはある意味では加藤咄堂が言っていた、そして紀平正美が言っていたような、日本の死の哲学のある局面に対して、彼は「ノー」と言っているということです。つまり武士的な死に急ぎみたくないことに対して「ノー」と言っ

◇戦中派の戦後

◎吉田満『戦艦大和の最期』(1952年)

「君国のために散る それは分る だが一体それは、どういうことにつながっているのだ  
俺の死、俺の生命、また日本全体の敗北  
.....これらいつさいのことは、一体何のためにあるのだ」

◎吉田満「死・愛・信仰」

(『戦中派の死生観』文藝春秋、1980年)

「お前の生涯を飾る一切のうち、いま死にゆくお前に役立つものがあるか。.....何も無い、何一つない、これが俺だったのだ。」

☆死を美化した自分は何者だったのか？

「欺かれてはならない。あのようなものが死ではない。死から十分にへだたり、生きることが平凡な確かさを持っているとき、そこにこそ死がある。死ぬか生きるかの刹那、あるのはただ肉体の、感覚の、動物の死のみだ、生きねばならぬ。正しく、愛をきずいて、生きるにふさわしく生きねばならぬ。」

ているんじゃないかと思います。

戦後の戦中派の人たち、私の父の世代がある意味ではこちらの方へグーっと行ったというか、そういうふうな感じを私は持っているわけです。我々が育った戦後の文化というのは、そちらの方へグーっと舵を取った。武士道という言葉が戦後口にするのはなかなか言いにくい



時代があったと思いますね。そういうことが反映しているのかもしれませんが。

ここにあるのは司馬遼太郎の本です。同じように、いかに現実的な知恵を働かせて国づくりをやり、経済発展を遂げ、共同生活をしっかり営んでいくかを重視した。それに対して一見、英雄的な、殉死というものは何の意味があるかと、そういうふうな考えを持った人だったと思います。乃木大将に対して司馬遼太郎は非常に厳しかったのですね。

加藤咄堂が持っていたような死を受け入れる姿勢は、ある意味では乃木大将が代表したので、夏目漱石の『ころ』にも出てきます。偉大なる者のために命を投げ捨てるということが魅力をもって受け入れられた。ある時代の日本人にとっては非常に自然なことと考えられていた。宗教とは言わなければ、宗教的な意味を持ったものと考えられていた。そういうこと全体に司馬遼太郎は疑問を投げ掛けている。この本は1967年に出た。この本の乃木希典は本当にひどく書かれていますか、いかに職務をしっかりと果たすことができなかつたか。その私的な恥辱というものを、英雄的に見える行為でごまかした

かというふうな感じで書かれているわけです。

他方、3年違いぐらいで生まれた三島由紀夫。この『英霊の聲』は特攻隊の人たちについて書かれています。その前に『憂国』という本を書いています。これは二・二六事件が素材となっている。国のために命を投げ捨てた人たち、若手将校たちというものの精神を戦後はいかに忘れてしまったかということを彼は痛切に嘆いた。この二つの本は戦後の死生観のある対照的なものを代表している、そういうふうにするわけです。非常に深刻な問題を非常に単純に述べておりますが、戦後精神というものが少し見えてくるかと思えます。

## II. 現世主義的な宗教性

少し話を変えまして、宗教史から死生観を見直してみます。日本の戦後というのは、宗教史的に言うと、これは私の専門的に研究しているところですが。いわゆる新宗教というものが大変発展した時代。創価学会は1930年に、『創価教育学体系』という本ができています。学校の先生だった牧口常三郎という人が始めた団体ですね。これは日蓮正宗という日蓮系の団体がベースになっておりますが、それに近代のプラグマティズムのような思想が組み合わさってできたものです。1943年に弾圧されまして戦後復興しますが、1950年には創価学会のメンバーはやっと5000人ぐらいだった。戦前に3000人、4000人いたと思いますが、一度完全にバラバラになっていた。ところが1970年には750万世帯となる。今ある規模とほとんど同じになっています。今、800万世帯と言っていると思いますが、実際には国民の3、4%、300万か400万人ぐらいとしても、それだけの人たちが10年ほど、20年ほどの間にですね、創価学会に魅かれていった。同じ時代にその他の団体も、立正佼成会とか霊友会系の教団というのは同じく法華系の団体ですが、巨大な発展をした。昭和の始めから、実は戦争に入る時代からもう既にその発展は始まっていまして、1970年ぐらいに大体頭打ち

## II. 現世主義的な宗教性

- 新宗教の生命主義的救済観
- 19世紀初め～1970年頃に最大の発展期  
— 黒住教、天理教、大本教、霊友会、生長の家、PL教団、立正佼成会、創価学会、真如苑
- 宇宙の本体は生命。人間は宇宙的生命の支流。神仏は生命の根源＝宇宙大生命。  
この世で宇宙的生命と一体となり、生命を開花させることが救い。

になるというか、横ばいになるという、そういうふうに言っていていいと思います。

この時代の日本の宗教を新宗教と言っていますが、その特徴を生命主義と言っています。世界のすべては根源的な生命から派生したものだという思想です。初期の新宗教では「親神さま」と言っておりました。黒住教、天理教などでは、親なる神からすべてのものが生みだされた。人類「一れつ」は皆兄弟だと天理教では言いますが、一つの親から生み出されたものだし、それは人間だけじゃなくてあらゆる生き物、存在がそうだ。もっと後の時代に流行った言葉は「宇宙大生命」といった言葉です。立正佼成会でも創価学会でもそういうような言葉で言ったりします。宇宙の本体は生命、仏さまというのはその生命の根源である。そこからすべてのものが分かれてくる。我々は最後には宇宙大生命に帰っていく。我々が何かいろんな不幸な目に遭う、辛いことがある、悲しい思いをするというのは、その大なる生命とのつながりが切れてしまっているということである。それを何とか回復するために日々心直しに努める。自分の考え方を変えていく。あるいはいろいろな儀礼に参加するんですね。天理教で言えば、「陽気ぐらし」



のための「みかぐらうた」ですね。陽気ぐらしというのはまさに生命主義的です。神さまは人間が幸せに暮らすのを、この世で幸せに暮らすのを見たいから人間をつくったということですね。ですので、死んだ先のことはあまり問題にならない。天理教では死ぬことを「出直し」と言いますが、向こうへ行ったらまたこっちへ戻ってくるということで、この世がすべてのことが起こる場所ということで、非常に現世的なものの意義が強調される。現世主義的な宗教性です。ですから死というものをあまり問題にしない。さっき紀平正美も死はないのだというふうなことを言っていました。紀平は死を非常に強調しながら、死は超えられると言っていた。

それに対してそもそも死というものをあまり問題にしないというのが、戦後の宗教運動の特徴になっています。これは創価学会の国際的な文化祭ですが、まさに生命があふれ出るような、そういう催しをやりまします。皆で、こうやって幸せになること。あなたも幸せになれるよというわけです。輪廻転生ということがあるとしても、元の仏教だと、輪廻転生ということが苦しみだから、その繰り返しから逃れなきゃいけないということでしたが、いや何度も生まれてくることこそ喜

### 立正佼成会・庭野日敬(1906-1999)

#### ◆ 概要

立正佼成会は法華三部経を所依の經典とする在家仏教教団です。家庭や職場、地域社会の中で釈尊の教えを生かし、平和な世界を築いていきたいと願う人々の集まりです。私たち会員は仏教徒として布教伝道に励みながら、宗教界をはじめ各界の人々と手をたずさえ、国内外でさまざまな平和活動に取り組んでいます。

- ◆ 「〈仏〉とは、宇宙の大生命です。この世のすべてのものを存在させ、動かしている根源の力です。」
- ◆ 「われわれの住む宇宙というものは、常に無数の衰滅と創造が繰り返され、それらが大きく調和している生きた世界なのである。」
- ◆ 「もし、すべてのものが変化をやめたら、それは永遠の死を意味する。変化があればこそ流動があり、流動があればこそ生命があり、創造もありうるのである。」

びなんだと、生命の大発展なんだと、そういうような新しいタイプの仏教をつくったということになります。

庭野日敬は、この時代の宗教家としてはなかなか優れた人物の一人だと思います。一つの偉大な業績としては、日本発の世界平和運動というのを担った人ですね。この人は新潟県の、それこそ2004年の中越



- 「宇宙生命を本体とする人間の生命は永遠のものである。死は生命の消滅を意味しない。「たいていの人は、現在ここにある肉体が死ねば、自分は消滅するのだと考えているようです。それは、目に見えるものしか実在しないとする錯覚に基づく考えです。／水が蒸発したら、水は無くなってしまったように見えますが、けっしてそうではなく、水蒸気となって存在しているのです。それがまた、いろいろな条件によって雨・雪・露・霜となって目に見えるようになります。」

- それを「無くなった」とか「生じた」と見るのは錯覚であって、「形を変えた」というのが真実なのであります。／人間の生命もそのとおりであって、無くなることはないのです。無から有は生ずることなく、有が無に帰することはありません。ですから、人間も、形を変えることはあっても、消滅することはありません。無限の過去から永遠の未来まで生き通しのものなのであります。」(『人間の生きがい』)

地震で苦しんだあの辺りの農家の出身で、学校教育は小学校しか受けていない。東京で奉公をしながら、様々な宗教に親しみ、最後に法華経に行きついた。法華経もほとんど独学ですが、非常にしっかりした理解を持っている。そういう人ですね。

この庭野日敬の言うところを見ると、「く仏」とは宇宙の大生命です。

この世のすべてのものを存在させ、動かしている根源の力です。」「われわれの住む宇宙というものは常に無数の衰滅と創造が繰り返され、それらが大きく調和している生きた世界なのである。」生命には創造と衰滅がありますが、衰滅よりも創造が強調される。『平家物語』だったら、いかに滅びるかということに人の注意は向いているわけですが、いかに発展するか。同じく無常、変化といっても注目点が違う。それから生命は調和しながらもしばしば不調和に陥るわけですが、ここでは調和の方が一方的に強調されている。変化することこそ喜びなんだと、生命の発展なんだというふうには彼は言っているんですね。従って人間の生命は永遠のものだ、死は生命の消滅を意味しないと。

これはですから、加藤咄堂にもありました。ある意味では江戸時代ぐらいにできた、神道、仏教、儒教。中国で言えば儒仏道。東アジアの近世の共通の世界観と言ってもいいでしょう。この世中心的な、大なる命の中に生かされていることを喜ぶ、感謝するというタイプの、そういう世界観ですね。そういうものとして仏教を理解している。

無くなったとか生じたと見るのは錯覚であって、形を変えたというのが真実であるという世界観です。人間の生命もその通りであって無くなることはない。無常とか無我とかいうんですが、それは無に帰するといったニヒリズムじゃない。むしろ永遠に形を変えて存在する。「生き通し」という言葉があります。これは黒住教でも使われています。神道、仏教、変わりなしに使われている。そういうふうな世界観を持っていた。大変、現世主義的というふうには言っていないかと思えます。

### III. 死者との親しみ

さてそれではですね、戦後の時代ですが、今、死生学で言われていることに、近代人は死を遠ざけてきた。この世のことばかり一生懸命

になって死を見るのを避けてきた。中世人は「死を思え」ということを強調して、いつも死を意識して死ぬまでの充実した人生を生きるということを考えてきたのに対して、近代人は死に向き合うすべを失っていると、そういうふうに言われています。

どうも戦後の日本の宗教というのは、そういう色合いが強かったのではないだろうか。伝統仏教の方が死を見つめる。それに対して新しい宗教教団は死から遠ざかる傾向がありました。しかし戦後の日本でも伝統仏教は生きていた。今も生きています。伝統仏教の機能の中に、ある意味では死や死者との親しみということがあったのではないだろうか。現世主義の戦後日本ではありましたが、その中に死者との親しみの感覚は非常に強かったのではないだろうか。それは家族の結束、家族といっても決して孤立した家族ではなくてその周りに親族等のネットワークがまだ健在だった時期でした。

ですから最近の様々な事件で昔と違うなあと思うのは、本当に孤立した人がいることです。人のつながりからはぐれちゃった人がたくさんいる。昔はそういう人も何とかネットワークの中へ抱え込まれていたんですね。日本の場合は親族やそれに類似したネットワークというのは非常に大きい意味を持っていたと思います。そういうネットワークと死者との親しみというのが深く関わっていたのではないかと。それがまた故郷ということとつながっていると思うんです。

私の『時代のなかの新宗教』（弘文堂、1999年）は、修養団捧誠会について研究した本です。修養団捧誠会は、天理教の影響を受けた修養団体ですが、修養団体にしては宗教的な色彩が強い、池袋に本部がある団体です。その本部は平和郷といいます。故郷の郷ですね。ですから皆が集まるということは、故郷に帰ってくるんだといわれています。

これは天理教に伝統がありまして、皆さん天理市へ行かれた方はご存じと思いますが、天理市に行きますと、あちこちに「ようこそお帰り」と書いてありますね。天理教の信者の皆さんは、天理市へ行くこ

### Ⅲ. 死者との親しみ

#### ◇戦後の日本と死・死者

- ◎現世主義。
- ◎しかし、死者との親しみの感覚は強かった。
- ◎家族の結束、親族の親しみのなお濃かった時期。
- ◎故郷＝母なるものの意識  
島蘭進『時代のなかの新宗教』弘文堂、  
1999年

とを「お地場がえり」といいます。「お地場」というのは全人類が生まれた場所。元の中山家の場所に、神様が最初の人類を創った。そここそ人類誕生の聖地ですね。今の天理教の神殿のある所です。ですので、天理教を信仰して、世界中から天理教の神殿へ来るということは、親の元へ帰ってくるのだということですね。親里と言っていますが、天理は人類の故郷だということですよ。そういうふうにと考えると、日本の新宗教は故郷意識が非常に強いですね。

「うさぎ追いし彼の山」という歌詞を含む「ふるさと」という歌があります。あるいは「赤とんぼ」というふうな歌がありますが、ああいう歌は近代日本人、唱歌に親しんだ人たちの故郷意識をととてもよく表している。それは演歌の中にもまだ反映していると思いますが、どうも現代のポップスだと、どうもそういう感じはしない。故郷という感じがどこまであるかですね。そういうふうに変わってきたのではないかと思うんですが。

その故郷は、自分たちが生まれてきた所であり、だから命の元であると同時に、死んで帰って行く所でもあります。そういう感覚があったと思います。これから紹介する話は私が大好きで、本当に単純な話

なので、分析すると「何だこれか」ということかもしれませんが、やはり興味深いです。

波平恵美子先生という方は文化人類学者で、病気や死のことについて日本の全国を回って話を聞いておられる。これは大分県の田舎で聞かれた話だそうですが。「昔は病人が出るとどうしましたか」と質問する。遠くの医療機関まで皆で運んで行ったり大変だったというような話ですね。そういう話を聞いて、「どうもありがとうございました」と言って別れる時の話です。「私が訪れた家の世帯主の父親に当たる人はその頃60歳代半ばだった……」、これは1980年代ぐらいですが。「インタビューのあと支度をして山へ出かけるという。それは桜の苗木を山に植えるためであった。その人は、自分の家の前の「マエヤマ」（家の正面に立った時に見える山の風景あるいは山そのもの）に見える桜の木は、自分の祖父が植えたものであり、今後生まれてくる孫や曾孫の代の人々が自分の植えた満開の山桜を楽しめるように、今のうちに桜の苗木を植えておくのだと言った」（波平恵美子『いのちの文化人類学』新潮社、1996年、21頁）。何でもなし話ですが。しかしそういうふうを感じている人というのは、死者と一緒にいると感じているし、自分の子孫と一緒にいるとも感じている。命の縦のつながりがあるわけです。

これは日本人が先祖崇拝の文化をもっていたと言われるようなことの根っこにあるもので、また親族が一体だと感じていることとも深く関わっていると思います。今、これはすごく失われてきているんじゃないだろうかと思います。これはちょっとエコロジック的でもありますね。未来世代への責任という意識です。未来の世代への責任ということは、過去の世代との連続ということともつながっていて、これはある意味では普遍主義ではない。つまり同じ土地に住んでいる人同士の縦のつながりで連帯を感じていて、同じ時に生きている人同士で横へ広がって行くのではないのです。キリスト教などの場合ですと皆平等だというけれども、過去の人とか未来の人との連帯感はほとんど表

「私が訪れた家の、世帯主の父親に当たる人はその頃60歳代半ばだったが、インタビューのあと支度をして山へ出かけるという。それは桜の苗木を山に植えるためであった。その人は、自分の家の前の「マエヤマ」(家の正面に立った時に見える山の風景あるいは山そのもの)に見える桜の木は、自分の祖父が植えたものであり、今後生まれてくる孫や曾孫の代の人々が自分の植えた満開の山桜を楽しめるように、今のうちに桜の苗木を植えておくのだと言った。」(波平恵美子『いのちの文化人類学』新潮社、1996,p.21)

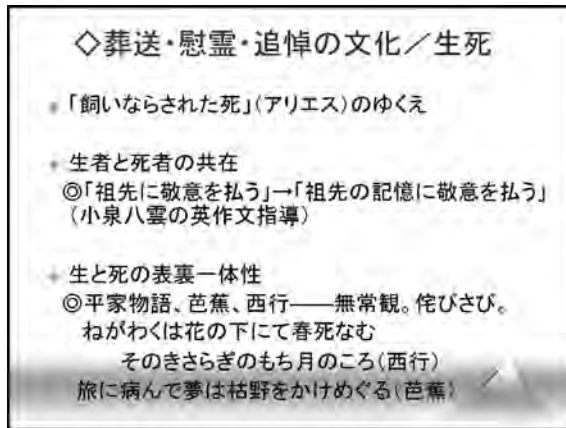
現しないです。死者に対する連続感というのを表現する場がない。その代わり、一生懸命布教する、横へつながっていくことを重んじるわけです。日本人の縦のつながりの連帯感もある種の拡充主義に向かつて一族で団結して力を強めようと戦う場合もあります。これは狭い所でずうっと生まれ変わり、死に変わりしている人間を同じ仲間だと感じている。そういう連帯感です。この意識の中には死者と生者が共にいるという感覚があって、これは日本人に非常に馴染み深い。東アジアにと言ってもいいかもしれません。これはもしかしたらアフリカにあるかもしれないし、ユダヤ人にもあるかもしれない、また他のいろんな所にあるかもしれません。

これは死と親しんでいる。死が奇怪なこととして現われていない。これと関係ありそんなことを死生学の最も大事な本の一つを書いたフィリップ・アリエスという人も指摘しています。この人は西洋の歴史の中で死がどう表れてきたかを研究した人です。彼の本のベースにあるのは、「飼い慣らされた死」と訳していますが、穏やかになった死という考えですね。そういうものが古代の人の感覚だったと。それが段々段々、個人の死になってくる、私の死になってくる、あるいはあ

なたの死になってくる。そうすると、何とか自分は助かりたいというふうになってくる。宗教を熱心に、自分の心の奥に問い詰めて考えるというのは、私の死という意識と関わりがある。私は天国へ行くのか地獄へ行くのか、それを真剣に考えれば信仰することを今ここで決断しなきゃいけないと、こういう意識になる。それに対して、その前の段階の死の意識を「飼い慣らされた死」とアリエスは言っています。

最近読んで分かったのですが、実はトルストイという人はそういうことに非常に敏感だった人で、トルストイの文学作品の中には個人の意識というものが肥大化していない農民の死の意識というものに主人公が憧れる場面が何度も出てくる。それはソルジェニーツィンみたいな人にも受け継がれてきて、ロシア文学の中で一つの伝統になっています。フィリップ・アリエスは多分、トルストイに相当影響されて、あるいはトルストイやソルジェニーツィンに影響されて、西洋の死の意識の歴史のストーリーを作ったと思います。本来西洋でもそういう生者と死者の連帯の意識があった。しかしそれが個の死の意識の圧倒的優位へ変化していった。裸の個がまったく一人きりで死に向き合うという意識になった。そして現代の死を疎外する人間、「逆立ちした死」とアリエスは言っていますが、何か裏返っちゃった死という、そういう時代になった、そういう話をしています。

これはパリのイノサン墓地という墓地です。十何世紀の図の写真なんですけど、屋根が開いていますが、そこにどくろが詰まっているんですね。町の真ん中の教会に死体そのまま葬られていて、そこで白骨化した人骨をそのまま屋根裏に詰めたりしている。日常生活のまったく外へと死を遠ざけていないんですね。こういう感覚が民衆の間では長く生きていたと述べています。民衆は死と離れてしまわない。今でもインド人は年を取るとガンジス川の川岸のベナレスに連れて行きます。インドの川岸には死体を焼いて流す所があります。そこで死体を皆で焼いて、灰を流す。そういうような感覚と何か近いものですが、こういう感覚、これは日本的な感覚と違う面がいろいろありますが、



それでも死と近い、死者と一緒にいるという感覚がある世界。西洋の教会には地下に死体がたくさん納められたりしています。あるいは聖遺物が納められている。キリスト教にもそういう死と近い意識というのはあったのではないだろうかと思います。

小泉八雲のこの話もまた波平先生のご著書に教えられたものです



(『日本人の死のかたち』朝日新聞社、2004年)。小泉八雲すなわちラフカディオ・ハーンですが、松江にいた頃でしょうか。日本人生徒に英作文を指導するとですね、祖先に敬意を払うという英文が出てくる。祖先はもう死んでいない。これは西洋語の感覚ですと、祖先は死んでいるから無だ。死者はいないということになります。ですから祖先に敬意を払うということはありません。それで「祖先の記憶に敬意を払う」という文に直させたという話です。これはすごく面白い話ですね。

今、実は私のところにイギリス人で死別の悲しみの文化比較の研究をしに来ている女性がいます。西洋人は死んだ後、死者と共にいる、*continuing bond* と言っていますが、絆は続いているという感覚を持っていないのではないかと。日本人にはそれがある。こういう論文を書いているアメリカの宗教学者がいる。それに対して、このイギリス人の女性は本当にそんなに違うのかと、そういうことを調べているんですね。彼女の結論だと、いやそんなに違わない。現代ではだいぶ近づいてきたと。つまり西洋人にも死者との絆が続いているという意識が濃くなったということです。

こういう英作文でですね、祖先に敬意を払うということをそのまま訳せないということは、非常に私から見ると特殊な意識です。西洋人の感覚では、死者がいないということですが、ひっくり返すと日本人の感覚では死者はいるということです。つまり死者は存在しているということであって、それは我々にとっては非常に自然なことです。それは生と死の表裏一体性というふうにも言えるし、生者と死者が共にいる、生のある所に死がある。死がある所に生がある。そういう感覚でもあろうかと思います。日本の文学作品には、まさに死者から促されて過去のことを語るというようなものが多いです。あるいは常に自分も死を意識している。この世の喜びを、花といいます。桜といいます。桜は命の盛りの時にこそ死を思わせる植物だということです。

そういう感覚は葬式仏教と呼ばれるものにつながっています。次のスライドの圭室諦成（たまむろ たいじょう）先生という方は、曹洞宗の僧侶だった、優れた歴史家ですが、1963年だったかにこの本を書いています。ですから葬式仏教というのは、仏教界の方が言い出したことです。確かに葬式仏教になることによって仏教は大事な存在意義を弱めてしまった、薄めてしまったところがある。しかし別の意味では大変大事なことをやっていたのではないか。右の方は97年に浄土宗の先生方が作った論文集ですが、葬式だけじゃなくて冠婚葬祭の祭、これは先祖祭りです。葬式だけじゃなくて死者の祭り。葬式仏教という言葉に元々法事も含まれていますから、死者の祭りの意味も含んでいた。お盆とか何回忌とか、そういうことは葬式仏教という言葉で論じていたわけですが、葬祭仏教と言った方がいいだろうという主旨です。だから同じ問題が30数年後に再び取り上げられたのですが、この先生たちは、いや日本の仏教は葬祭仏教であることによって大事な役割を果たしてきたのではないだろうかと述べています。

しかしこの97年、その葬祭仏教が今や危うくなっているということが、ここで出てきています。つまりお寺で葬式やってもらっても何となく実感が湧かないし、何か心がこもってない。実際、お寺と関係なしに葬式をする人が増えている。焼き場に行く人はますます減っている。お通夜は本当に簡略化されたものになってしまった。

このスライドは60年代の本から引いてきたものですが、左側の上の写真はお盆の場面ですが、この写真も私が大好きなもので、実はどこから引いてきたのか忘れてしまったのですが、昔のお盆、田舎のお盆という感じで、そこに亡くなった方の絵だか写真だかありまして、白木の位牌が置いてあるらしい。こちらにはご仏壇、もしかして神棚でしようかね。そして皆で男中心に、死者のことを思いながら共に関心なことを分かち合っている。こういう感覚は私の記憶の中には濃厚にあるのですが、私の息子の世代にはほとんどないのではないだろうかという気がするのです。非常に大きなものが変わった。左側の下の



写真は施餓鬼の後にお塔婆をお墓に持って行く人たちでしょうか。右側の写真はその頃の造成墓地ですが、今の造成墓地と比べるとだいぶ雑然としています。日本の都市の混雑ぶりと似ていますが、ごちゃごちゃとしているという感じですね。今の墓地はもっともっときれいになっているかと思います。



次のスライドですが、右側の写真は古い時代のものです。家の墓の前の時代は、むしろこういう個人の墓だったので、家の墓というのが本当に広まったのは明治以降です。ですから古い時代は、個人がそれぞれに、先祖の大きな塊の中へ取り込まれる。海の彼方のあの世、つまりは先祖のいる世界へ行くというような感覚だったんでしょう。左

側の二つの写真は新しいものです。下の写真は新しい集合墓ですね。供養墓みたいなもので、個人で入るお墓、これが今、流行っている。単身の人が増えました。独身で一生終わる人が増えたし、家の墓なんか入りたくないという人も増えてきた。家の墓もいけれども、供養墓にも一緒に入るよと言う人もいます。

その上の絵ですが、冠婚葬祭のガイドブックを見るとこういう絵が書いてある。お墓参りに行くのですが、核家族ですね。今は、こういうふうなお参りの仕方になるのでしょうか。この家族は何によって支えられているのだろうかと考えると、何か危うい感じがする。この絵からでも何かそういう、現代人の墓参り風景というものの落ち着きの無さというものが見えますね。

次のスライドは、ご詠歌講のようすです。全国にあるのですが、東北地方の曹洞宗のご詠歌講（梅花講）にしばらくお邪魔をしたことがあるのです。近所の方が亡くなると、昔はご近所の人たちが墓穴を掘った。そして行列を作って行った。女性が掘る役だったりした。今はもう火葬の時代になったのでそれはないけれども、近所の方が亡くなると、お坊さんがお経を上げて、帰った後に近所の方が集まってチリンチリンと鈴を鳴らしながらご詠歌を歌う。そういうことがあります。これは江戸時代、あるいはもっと前からあるもので、田舎の人たちが講を結んでやっていたものですが、大正時代ぐらいから仏教のお寺がそれを組織するようになりまして、最初は真言宗からですが、曹洞宗のようにそういう文化とはあまり関係がない宗派も、檀家とお寺の結びつきの大事な手掛かりとしてご詠歌講というのを結ぶようになります。戦後です。第二次世界大戦後に曹洞宗は梅花講というのをつくりました。大体、40歳、50歳ぐらいになると女性は皆、これへ入る。そして住職、住職の奥さんが指導者になってご詠歌をやったわけです。なかなか難しいのです。節廻しとか非常に複雑です。上達するとどんどん段が上がっていったりします。階級が上がっていくようになっていきます。家元制みたいになっているわけですね。皆、少しでも

## ◇御詠歌講の世界

## ◎梅花流「追弔御和讃」

その名を呼べばこたえてし  
 笑顔の声はありありと  
 今なお耳にあるものを  
 おもいは胸にせき上げて  
 とどむるすべをいかにせん  
 溢るものは涙のみ

(二) 立ちては昇りのぼりては  
 哀しく薫ゆる香(こう)の香(か)に  
 かずかず浮かぶ思い出よ  
 供えし花はそのままに  
 霊位(みたま)の座をばつつむなり  
 清きが上に清かれと

(三) 一世(ひとよ)の命いただきて  
 会うことかたき勝縁(えにし)をば  
 夢幻(ゆめまぼろし)となどかいう  
 うつつの形(かげ)は消ゆるとも  
 うつろうものか合(か)わす掌(て)に  
 契りて深き真心は

位を上げようと思って熱心に練習する。そういうシステムです。曹洞宗では戦後に始まりまして、1980年代の終わり頃が最盛期です。この頃に全国で講員18万と言っていました。すごい組織率ですね。これは大体、都市よりも農村部の人が多い。主婦のたしなみ、つまりはご近所の人との付き合いの大事なこととしてご詠歌をやっていたわけで

す。

ところが今、これは衰退しました。まさに今これをやる人は高齢化しておりまして、若い人はなかなか入って来にくい。演歌でさえ皆歌いませんから、もっと渋い節廻しですから若い人はやろうとしない。ただ、四国のお遍路は今、流行っていますね。お遍路も熱心になると、まずは般若心経を唱えますが、さらに熱心になるとご詠歌もやります。グループで行く時は皆、ご詠歌をやるので、若い人でも覚える人がいると思います。お葬式の時にやるだけではなくて、近所で仲間をつくって、いろんな所に巡礼に行ったりするんですね。

中でも重要なのは「追弔御和讃」というものです。何故、ご詠歌講が戦後に急速に広まったかと言うと、やっぱり戦争で亡くなった男の人たちを弔う女性たちが熱心にやったということがあると思います。こういう歌を歌うと皆さん自ずと涙が出てきてしまう。この中には仏教の教義が入っておりますけれども、それよりももっと何かベーシックな宗教心というか、あるいは生者と死者の交流、continuing bondの意識ですね。そういうものが大きな役割を占めていたと思います。

#### IV. 死と向き合う孤独な個人

時間がないのでちょっと先へ行かせていただきます。そういう1980年代ぐらいから、葬式仏教といってももう限界に来ているのではないか、そしてご詠歌講といってももう続いていかないのではないか、という状況になってきました。そういう時代に新宗教の活発なものは新しいグループが変わってきた。オウム真理教に代表されるような新新宗教とよばれるものです。これまではどっちかと言うと、中年の女性というものが中心だったところに、若い男性が熱心に関わるタイプのグループができてきた。統一教会とか、幸福の科学とか、新鸞会などです。一つの特徴は、この世で幸せになる、つまりは陽気ぐらしの宗教ではなくて、この世は悪なる世界なんだという、そういうペシミ

#### IV. 死と向き合う孤独な個人

◇新新宗教(第4期新宗教)の興隆

◎阿含宗、GLA、真光、統一教会、エホバの証人、オウム真理教、幸福の科学

◎旧新宗教との違い——この世の悪の強調

「この世のみの損得しか考えない人は、／  
真の富者とはいえない。／……なぜなら、死  
後の世界は厳然としてあり、／天国と地獄の  
どちらかを／選ばなくてはならないからだ。」  
(大川隆法「来世に賭ける」『幸福の科学』  
1991年7月号、p.1)

ティックな考え方です。大川隆法の幸福の科学は、幸福の科学というぐらだからずいぶん楽天的な宗教かしらと思うと、割と寂しい世界観を持っています。「この世のみの損得しか考えない人は、／真の富者とは言えない。／……なぜなら死後の世界は厳然としてあり、／天国と地獄のどちらかを／選ばなくてはならないからだ。」といいます。永遠の命が向こうの世界にある。そこからこの世のある種の人生を選び取って出てきているんだというわけです。今、苦しいことがあるのは、自分の魂が成長するためだ。ですからこの向こう側に本拠がある魂の次元でいかに靈的に成長するかということを常に考えている。この世での人間の関係というのは仮のものであって、次に生まれてきた時はまた別の人と関わるので、家族関係というものは非常にはかないものと感じられています。ですから絆よりも孤独な魂の向上、段階的に向上していく。そこに宗教の意義がある。非常に孤独な、それからあの世中心の、また内面が重んじられ、それが向こうの世界へ通じているという死生観です。

井上雄彦という人をご存じの方いらっしゃいますでしょうか。年齢層で区分されますですね。『スラムダンク』というバスケの漫画を描





いた人ですが。この『バカボンド』は今、25、6巻までですかね、出ているそうですが、全部で4000万部だそうです。元々はしかし吉川英治の『宮本武蔵』、1930年頃の大衆小説ですね。もちろんこれは武士道に関わっています。それを現代風の、現代のビジネスマン、孤独に浪人のように戦い抜いていくビジネスマンの感性に合わせてリメイク



した、そういう作品ですね。「何故、俺を生んだんだ」という、非常にニヒルな男が出てくる。この宮本武蔵はまさにニヒルですね。親を恨んでいる。親は何か子供に、自分たちの都合の良いことだけを望む。本当に自分を受け容れてくれてないと親を恨んでいる。だから親との絆ということが信用されていない。そういう世界ですね。そうい



うニヒルな八方破れの人生観、その中でひたすら戦い抜いて人を殺しても悔いない。ひたすら勝つことだけを願う。世界一になると願う。そういう人間を描いてるわけです。そこへ沢庵和尚が出てきて、「そんなお前、無茶な生き方を続けてどうするんだ」と諭している場面ですね。もっと静かに己を眺めてみたらどうだ。「闇の他に何も無い」と書いてあります。「お前はそんなふうにはできていない。闇を抱えて生きろ。闇を見つめて闇を抱えて生きろ」とあります。これを見ると何か非常に深いことが分かったような気がするんですが、翌日ぐらになると、何だこれはということになるかもしれません。これを読むと何か今の若者の心の奥底に響いてくるものがあるらしい。何の知恵にもならないけれども、何かこう共鳴だけは、共感だけはできる。こういうことではないかと思うのです。こういうふうなニヒルで孤独な、しかし死を常に意識して生きている。こういうことに関係して、学生に「自殺って考えたことある」と尋ねると、かなりの高い割合で手を上げます。この世に生を与えられているということをそのまま受け入れていない人間といえるわけです。

こういう経験と臨死体験ですね。内面を通して向こうの世界へ、こ



これはヒエロニムス・ボッスの16世紀初めの絵です。人類の経験の中には死ぬ時にあの世が見えてしまう、どうもそういうプログラムが脳に刻まれているのではないだろうかと考える人もいます。そのぐらい死にかかって生き残った人は同じような話をする。そのことを初めて提起したのが、レイモンド・ムーディという精神医学者で、1970年代にこの臨死体験というコンセプトを出した途端に爆発的に世界で流行した。これは先ほどのホスピス運動と並行して、現代人の死を見つめるという運動の大変重要なモメントになっています。大事な点は、この臨死体験をした人は大体死が怖くない、死を受け入れやすくなる、ということです。

これはカール・ベッカー先生、私どもの仲間で、京都大学で宗教学と死生学を研究している方ですが、筑波大学におられた時に、常総学園高校の野掘拓路（たくろ）君が交通事故に遭って死にかかって何ヶ月も生死の境をさ迷った。生き帰って来た時に、その経験を話した。それを本にしたものがこれです。筑波大学の学生が絵にしたのが次のスライドです。死の時、何か三途の川のようなものを渡って、向こう側から何か光が見えてきた。その前に一生の出来事が走馬灯のように



駆け巡った。そして向こうに曾お祖父さんが現われてきて、「お前帰ってくるな」と言った。そしてその途端に、生きている世界の家族の顔が浮かんできて引き戻された。そういう話ですね。こういう話は次のスライドで示されているように、今アンケートをとりますと、「いやよく分かる」という若者が多い。輪廻転生、それから臨死体験とい



うようなことについては、若者の間では肯定的な意識がかなり高い。

キリスト教圏のイギリスでは、死んだら最後の審判の時に天の神の元へ召されるというのが正しい教理であって、生まれ変わるというの  
 はあり得ないわけです。復活といっても、何度も生まれ変わるという  
 ことはないので、一回だけ永遠の命を得るということが復活です。そ  
 のイギリスで輪廻転生を信じるという人が、1970年代にグッと増え  
 た。その後はそんなに増えていないのですが、一つには臨死体験とい  
 うニュースが広まったためでしょう。今、西洋人の中で広まっている  
 のはこういう意識と、もう一つはベジタリアニズムでしょう。このこ  
 と自身はたいへん面白い現象です。ですからこれは国境を越えてグロ  
 ーバルな文化として新しい死の文化が広まっているといえます。

「千の風になって」という歌もそうですね。これもドイツから来た  
 女性を慰めるために、アメリカ人の主婦が作った歌だそうです。特に  
 高い教育を受けたわけではない人が、友達を慰めるために作った歌  
 が、ホスピス運動などを通じてじわじわじわじわと広まって世界中の  
 人が歌うようになった。日本では2年前ぐらいにNHKで紅白歌合  
 戦で歌われたので、今、「君が代」に続いてよく知られる歌かもしれ

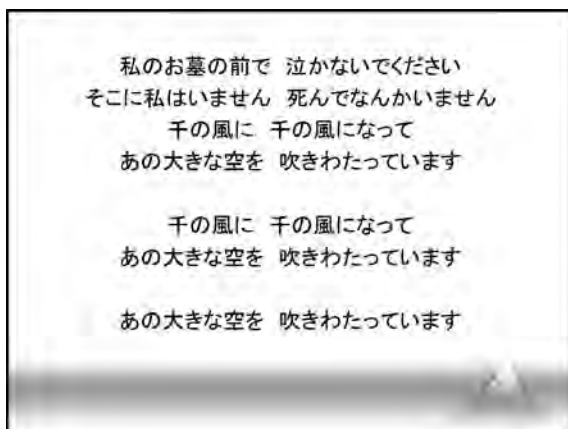
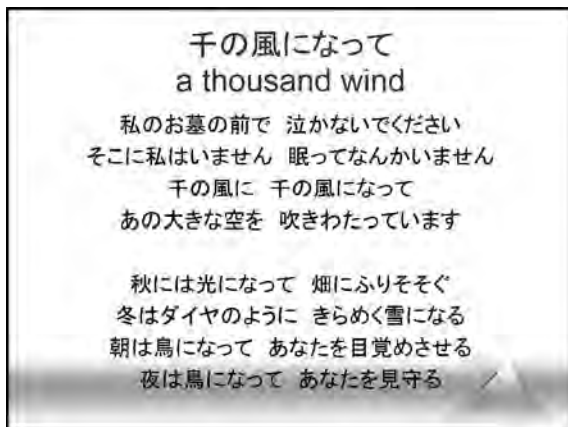
**〈輪廻転生〉**

- ・井上順孝「大学生の宗教意識」『國學院大學日本文化研究所紀要』第72輯、1993(1992実施、4005人)
- 同 「現代大学生の宗教意識」『中外日報』1995.10.31(1995実施、3773人)
- \* 死後の世界の存在——信じる:29.9%、ありうる:40.2%
- 臨死体験——信じる:21.0%、ありうる:48.1%
- 輪廻転生——信じる:15.3%、ありうる:36.8%
- \* イギリス人で輪廻転生を信じる人。(ギャロップ調査)  
1969年:18%、1979年:28%

ません。そのぐらいよく知られる歌の一つになりました。この歌の特徴は、死者が近いのですね。これは日本人などのアニミスティックな意識に近い。どこにでもいる。遠くの天国に行ってしまうわけではないので、すぐ近くに来れる、話しかけてくる。こちらも語りかけることができる。しかし非常に孤独ですね。一対一の世界で、そして風に乗って宇宙を飛び回っているの、集合体の中にいない。昔は柳田国男的な世界で言えば、死んだら山の中へ入っていく。そこには親族の集合的な魂がある、故郷に帰っていくわけです。それに対して、これは広大な宇宙を孤独に駆け巡っているという意識ですね。宮沢賢治のような、この宇宙の星になるのだという、それに近いような意識です。これはですから、グローバルな意識で、日本の戦後の意識とはだいぶ違う孤独な人間の死生観であろうかと思えます。

おわりに

こういう中で我々が今試みている死生学というのは何をやるべきなのか。私はやはりアリエスが言うところの、「飼い慣らされた死」と



いうものを何ほどこ回復する必要があるのではないだろうかと思えます。ハイデガーみたいな人は、孤独に死を見つめて、残りの時間をどう生きていくかということ突き詰めて考える。これこそ現代人が本来の生き方を回復する道だという。こういうタイプの議論、実存主義的な議論と言えます。そういうものにも大いに魅力はあるわけです。



## おわりに

- ◇かつて日本人がもっていた、死との親しみや生の充実感が見失われがちな現代社会のあり方を反省しながら、日本文化を見直したい。
- ◇「死と向き合うすべを忘れた」文化とともに、「死をもて遊ぶ」文化をも超えて、一人一人が自分の人生にふさわしい形で死と向き合うことができるような環境を整えることが求められている。
- ◇よりよく生きることの在り方を十分に示すことが第一の課題。死がもつ輝き・引き込まれるような深淵につりあうだけの生の輝き・生の重みを示すことができるような生き方が求められている。

が、何かそれだけではいびつな所がないかという気がしています。自分の為すべきことを当たり前にして次の世代に譲り渡していく。そして慌てたり、深刻ぶったりしないで死を受け容れられるような、そういう態度を育てる必要があるのではないだろうかと思うのです。そういうことが死生学の一つの任務ではないだろうか。

実際に今、本屋さんへ行けば、死についての本がたくさんあります。そこには学者や芸術家の洗練された思索も含まれていますが、我々の隣人、市民が書いた死についての思いがいろいろ出てくる。映画にもマンガや文学作品の中にもそうした身近な死の意識が映し出されている。そういうものを我々は聞いたり見たりしながら、あるいはさっきの「千の風になって」というような歌を歌いながら死について考えているわけです。

永六輔さんは岩波新書に『大往生』というのを書きましたが、あれも面白い本です。何気なく普段、冗談のように死について語っている。そういうのを集めた本です。そういうふうにして現代人は知恵を継承していくのですね。人間関係が希薄になって失ったものをいろいろな形で取り戻していく。そういうことが必要になっているのではない

だろうかと思います。

確かに日本の近代には武士道としばしば結びついたような死生観復興の運動、そして乃木希典、三島由紀夫が代表するような死の文化もありました。孤独な死に英雄的に耐え、大義のために進んで死に向き合っていくというふうな文化の遺産です。

しかしそこにはやや危ういところもある。何か死が実際以上に魅力的に見えてしまう。死ぬことが輝かしいパフォーマンスとして意識される。人を殺して自ら潔く死ぬと何か格好いいというような考えになびいてしまう人がいるということですね。これは現代社会のかなり重い病気の一つではないだろうか。死のポルノグラフィーと言った人がいますけれども、そういうことをうまく避けていく必要があるだろうと思います。

最後は私の趣味の世界に入ります。江戸時代の俳人、小林一茶は、子供の時にお母さんが亡くなりました。そして継母が来て、男の子が生まれてしまったので、15歳の時に江戸に奉公にやられ、そこで俳人になりました。俳人というのは芸を売る商売ですので、なかなか身を立てるのは大変です。さっきのバカボンドの世界に近いかもしれませんが。現代の若者と近いかもしれませんが。そして当時の江戸は男が多かったです。それで結婚できなかった人が多かった世界です。また、たくさんの方が死んでいく、疫病、災害ですね。そういうところでした。ですから江戸時代の人口は増えない。地方の労働力のある部分は世界的な大都市であった三都（江戸、京都、大坂）などに流れ込んでいった。しかし増えない都市の人口の背景には、そういう都市生活の厳しさがあったと思います。

だから一茶もあまり恵まれない人生を歩んで、50歳まで結婚できなかった。それでお父さんが亡くなった時に、猛烈な遺産相続闘争をやって自分の土地を取り戻します。一茶は、実に江戸人らしい醒めた人です。それで田舎へ帰りまして、結婚して子供をつくりますが、一男三女が皆、亡くなってしまいます。4人の子供が亡くなり、奥さんが

亡くなり、次の奥さんとまた離婚した。そうして、最後に残った子供は、一茶が死んでから生まれた。そういうふうな人生です。

そういう中で『おらが春』に出てくる子は、「さと」という子で数え年の2歳で亡くなってしまいます。私はこの句がとても好きなので、皆さんいかがでしょうということです。「露の世は露の世ながらさりながら」。日本人が昔から持っている無常観なんですけれども、露の世というのはいかにもはかない。そういうふうにして納得するつもりだけれども、やはり納得できない。この世の執着というものはどうしても残る。さとが亡くなった後にできた句ですが、無残な死の力というものに押し倒される、圧倒されるような思いの中で何とかそれと和解しようとしている。

実は一茶は熱心な浄土真宗の門徒でありまして、しかし宗旨通りに死んだら極楽浄土へ行くというふうなことは考えていない。浄土へ行けるというようなことも全部忘れてしまって、あなた任せなのです。「ともかくもあなた任せのとしの暮」というのは、家計もなかなかおぼつかない、わけもわからない悲しみに心がふさがったままそれでも新年を迎えましょう、という話ですが、実は「あなた」というのは阿弥陀仏のことを言っているのです。すべてをお任せします。そういう心境を表現しています。「老が身の値ふみをさるゝけさの春」。私も今、大学で講義をする時はこういう感じです。これも本当に現代的です。すごく冷たい世界、江戸の冷たい人情の世界をよく見ているというか、エゴイズムというものをよく見ている人だと思うのです。ですから何となく一茶の句というのはひがんでいる。弱い者に同情しているということですが、まあひがんでいるというふうにも言えます。自分が何でこんなひどい目に遭わなければいけないんだと言って、偉そうに意地を張っている。そういう世界かもしれません。

文学者もそんな意識でしょうね。特に芸人ですので、豊かなパトロンに食べさせてもらっている。そういう形ですね。「永き日に身もだへするぞもつたいな」。無の中に生きている、無常の中に辛うじて生

## 一茶に学ぶ

楽しみ極りて愁ひ起るは、うき世のならひなれど

……

露の世は露の世ながらさりながら

さと女卅五日 墓

秋風やむしりたがりし赤い花

我やうにとっさり寝たよ菊の花

露の玉つまんで見たるわらは哉

他力信心信心と、一向に他力にちからを入れて、頼み込み候輩は、つひに他力繩に縛れて、自力地獄の炎の中へとぼたんとおち入候。

ともかくもあなた任せのとしの暮(以上、『おらが春』1825刊)

老が身の値ぶみをさるゝけさの春

春雨や喰れ残りの鶉が鳴く

鳩の恋鳥の恋や春の雨

しよんぼりと雀にさへもまゝ子哉

是がまあつひの栖か雪五尺

死支度致せ致せと桜哉

いざさらば死ゲイコせん花の陰

日が長い長いとむだな此世哉

永き日に身もだへするぞもつたいな

永き日や嬉涙にほろほると

きている人間。だからこそうれし涙が出てくると、そういうふうな心象世界を表現しております。

私は父が76歳で亡くなった時につくづく思ったことなのですが、うちの父親は、最後まで、もっと生きたいと言いました。私も忙しかつたけれども、できるだけ闘病生活に付き添うようにしました。お見舞

いに行くようにしました。その時に「お前忙しいから来るな」とはあまり言わなかった。そして最後に「死ぬからもう来なくていい」というようなことは言わなかった。それは現在のホスピス的な考え方からすると、いやあの人はまだ死を受け入れていないよという話になるかもしれませんが、私が一茶に感じるのは、この世の執着ということに恥ずかしいと思いつつもそれを大事にするということです。皆と一緒に生きているということがやっぱり良いことだなという思いを述べる。そういう人なつっこい感じがします。

潔い死ということが日本にもあると思うのですけれども、これは浄土教や武士道で表明されている。他方、日本人の田舎人の世界の中には、共に生きてきて、また共に生きていくという世界を大事にしようよという思いがある。もちろんそのために命を投げるということもあるかもしれませんが、しかし、ヒーロー的なものよりも、むしろ日々共にいる親しみの感覚を大事にしている。そういう感覚があるのではないかと思います。これは私の趣味でありますけれども、それを申しまして、若干時間を過ぎましたけれども、今日のお話を終わらせていただきたいと思います。どうもご清聴ありがとうございました。

## 質疑・懇談

質問1 島菌先生、大変ありがとうございました。とても素晴らしいご講演聞かせていただきまして、非常に材料も豊富ですので、非常にお話が多岐に亘っていたと思います。ちょっと私みたいにはぼやけておりますとですね、大きな話の筋といいますか、そのへんが少し分かりにくいところもございましたので、今日90分のお話の大きな太い筋のところをもう一度ご確認を、最初をお願いしたいということが一点です。そして特に、生命主義的世界観についてですが、それが新宗教にかなり共通する、共有されていた世界観だということでしたけれども、そのへんが戦前やもっと日本の歴史とどのようにつながっているのか。あるいは現代、少しそういう生命主

義の世界観があまり信じられなくなっているとか、別の方向へ世の中の考えが移っていかうとしているとすれば、何故そういうふうになっているんだろうかというあたりを少し説明していただけるとありがたいと思うんですが、よろしく願います。

**島菌** 死生観と言うと個人的なものと関わっているっていうことを最初に申しましたけれども、個人的な思いと関わらせて述べましたので、どこまで一般化できるか分かりません。

一つは何で今、我々は死ということ強く意識するようになったのか。確かに高齢社会になったからだとか、病院で疎外感を感じているとか、そういうことはありますが、必ずしもそれだけで説明できるわけではないので、どうしてそうなんだろうと思うわけです。

確かに、死について考えてもしょうがないじゃないかという考え方には一理あるので、それが戦後の意識の特徴だったのではないかと思います。それでそれは戦中派の意識と結びついているのかなと考えたわけです。日本人は死をあまり意識しないんだという考え方もあるけれども、ある種の特異なパターンがあって、それはどこか武士道と結びついている。そういうタイプの潔い死というふうな考え方があるんじゃないかと思うのです。その二つを軸にしまして、今後の我々の世界観というものを考えてみたというか、そういうような筋かと思えます。

別の言い方をすると、人とのつながりというものが弱まっている現代人。それをすぐに取り返すということではできないんだけれども、ですからある意味で孤独を受け入れざるを得ない現代人ですが、どういうふうにしたら孤独の危うさといいますか、辛さというものに飲み込まれないですむかということ振り返っていくというか、そういうことだと思います。

昔は皆で一緒にいるという安心感があったと思うわけです。現在孤独になったというのが大きな流れです。その中で孤独を受け入れていかざるを得ないということも認める。その上でどうやってつながりを回復できるか。そういう流れで考えてみたいということですね。

その中にやっぱり全体的に日本的なと言いますか、それは宇宙全体の中の自己といいますか、宇宙とつながっている自分というような意識が出てきやすい。それがベースにあるのではないかということです。

**質問2** 今日は先生の講演の題を見まして、家内と二人聞きに行ってみよ

うということで参らせていただきました。

私は大正11年の生まれで85歳で、家内は82でございます。私は昭和19年の9月9日にミンダナオ島要員としてフィリピンに派遣されましたが、途中で米軍の潜水艦に攻撃されて船が真っ二つに折れて、轟沈いたしました。千百何人乗っていましたが、救助されたのは108人だったと思います。その中で病院に行って残ったのは83人ぐらいでした。私は7時間半漂流していたのでございますが、その時に、ああこれで終わりか、最後だなあと思った瞬間に、田舎の風景が頭によぎりました。私は11歳の時に母が亡くなりましたので、母の面影、父の面影、そして故郷の景色が頭に浮かんできました。皆、うめきながら漂ってその声も段々と遠ざかっていく状況は、まるで生き地獄のようでした。

それで私は、ああこれで最後かと感じた時に、日曜学校で歌っていた親鸞の歌を思い出しました。「1人行ってしまう喜びなば、2人と思え。2人にして、喜ぶ折りは2人なるぞ」という日曜学校で習った歌がふっと頭に浮かび、あっ親鸞さんがいたと思いだした途端に、苦しかった、ああこれで終りかと思った気持ちがほっと楽になりました。そういうことで救助をされて、フィリピン、ボルネオと転戦して帰ってきました。

これから自分はどう生きていいんだろうと、その生き方についてずいぶん苦労しました。大学の専門学校を出て会社に勤めましたが、あの当時の上野の状況は戦災孤児がチョコレート、チョコレートといって進駐軍の服の裾を引っ張り、もうちょっと大きい子供は靴の台を持って追っかけているような状態でした。そういう状態を見て、自分は何のために戦争に行って帰ってきたのか、生きて帰ってきたのか。こういうことだったら亡くなったほうが良かったなという気持ちもありました。それで教員になりました。それで私は自分の死生観といいますか、そういうものを学校の子供のために一生捧げようというつもりで教員になったんですが、あまり長くなりますのでこれで止めさせていただきます。

**島菌** とても印象的なお話ありがとうございます。私はこの間、「ひめゆり」という映画を見ました。沖縄の住民で、最後に手りゅう弾で亡くなった方がだいぶいるんですね。手りゅう弾は軍隊が与えたかどうかというのは非常に問題になるところです。

その時に何故、手りゅう弾を投げないというふう考えたかということ

を、今生き残った方がお話しになっている。その時にお母さんの顔が浮かんだという話がとても多かったのですね。ですので、そういう肉親の絆というのがいかに大事か。今日の私の話でも、絆ということです。それが大きな意味を持っているというふうに思ったのですけれども、先輩のお話からもそういうことを一つ感じました。

それからもう一つは、親鸞の日曜学校のお話が浮かんだということですが、やはり宗教とか何か個人が自分を支えるものを持っているということが大事なんだなと思います。それは日本人の場合はいろんなものから吸収しているはずなのですが、どこに自分のよりどころになるものがあるのか、見失っていることが多いと思います。

そして特に戦後、戦争に負けた後は、神も仏もあるものかとなってしまって、そういうものを捨ててしまったところがあったのではないだろうかと思います。今の若者に教えたことの一つは、やはりそういう自分なりの支えになるものをしっかり求めてくれということかと思っています。

**質問3** ありがとうございます。非常に面白いお話、大変多くのことを学ばせていただいたわけですが、一つだけ質問させていただきます。

というのは、輪廻転生についてのギャラップ調査というのに出された数字に非常に興味を抱いています。これがおそらく先生のお話の中を貫いている生命の縦のつながりということと関係があると思うんです。

キリスト教世界では、やはり死んで神の国へ行くと考える。従って輪廻転生というのは起こらない。輪廻転生というのを認めるとい人が、イギリスが69年には18%であったのが、79年には28%と、非常に急激な増加の率なんです。

私はほとんど毎年ヨーロッパに行くわけなんですけど、キリスト教会、カトリックもプロテスタントも、アングリカンも、やはり少し形骸化して、本当の意味での超越神、ないしは創造主というものを信じる人が減っているのではないのか。キリスト教徒の世界における総人口は今でも世界的には一番多く、第一の宗教になっていますね。二十何億。しかし本当は、もう既にイスラム教徒に抜かれているのではないのか。本当の信者の数ということからすると。

ここで輪廻転生ということ信じるといことはやはり、これはもう本当の彼岸がないということですからね。「彼岸」と「此岸」のこういう明確



な区別がないということです。輪廻転生というのは仏教世界にある。インド、今のラマ教のチベット、それがずうっと日本に入ってきてそういう思想も定着しましたがけれども、極めてインド的な思想ですね。

それとはもう一つ、輪廻転生ではなくて、それとは別の生命の縦のつながりという思想が東アジア全体に、いわゆる稲魂の信仰としてありますね。ですからそういう思想は日本人の中にもあり、それから多くのアジアの地域で生きているのに対して、むしろ西欧の方で本来のキリスト教徒というものが減っているということが、こういうギャラップの調査になって出たと理解してよろしいのでしょうか。

**島菌** アメリカのある学者が、21世紀のキリスト教は北半球のものから南半球中心のものになるだろうと言っておりまして、実際もう既にそういう動きになっている。だからヨーロッパ人に聞くと、何教かと言えば、キリスト教と答えるけれども、一応信仰はあると言ってもいいかもしれませんが、神父、牧師、聖職者になろうという人がいないんですね。アイルランドはいまだにかなり熱心なカトリックが多いですが、聖職者になろうという人はガクッと落ちている。ですからアフリカ人が来たり、アジア人が来たり、中南米から来たりということになっているんですね。

ですからヨーロッパにはそういう傾向がありますが、しかし南のほうは、つまり先進国でない世界は、あるいはアメリカ合衆国も含めてですが、キリスト教はかなり増え、イスラム教も増えている。イスラム教徒は、やはり死後の報いということを非常に強く言いますね。ですから死んでから永遠の命を得るということは、イスラム教徒にとってかなり大事なのです。

それから私もアメリカにいた時に、キリスト教の教会にだいぶお邪魔をして、話を聞きました。それから学生の、布教してくる若者と話をしたりしましたが、キリスト教にとっては死んでから永遠の命を得るということは非常に重要です。ですから「君は死をどういうふうに迎えるつもりか」ということを最初からどんと聞いてくる。そういう印象を持っています。それは今だに強い思想だと理解しています。強く孤独を感じ、確かなものを求める時には永遠の命こそが核になるという思想ですね。遠い天国で永遠の命を得るという考え方は、やっぱり非常に強い思想なのではないだろうか。ですから人類の未来を考えると一神教とか、死後救済の思想というのは簡単に減びないぞというふうに思っております。

どうのとかいうことです。そういうことに対して非常に関心がある層というのは現実にやっぱりいると思うんですけども、それは今日先生がお話になられたその流れの中でどういうふうに位置づけられるのか。あるいは先生ご自身はそういうものをどういうふうに評価されるのかというのをちょっとお伺いしたいと思います。

**島菌** 江原氏の世界と「千の風になって」の世界はかなり近いと思います。非常に孤独で、そして非常に親しい、濃く細いというか、非常に緊密だけれども、支えられていないつながりというものがあると思うのです。大事な人の数が少ない。それこそ携帯電話で常に繋がっている人というのはそんなにたくさんいない。その人との繋がりが切れるともう非常に孤独になってしまう。そういう感じがあるのではないか。少数の人が別れてしまうと、全く慰められない、そういう思いを持った人が多い。そういう人に江原さんは慰めのメッセージを出しているのです。江原さんはしばらく前ならばほとんど教祖みたいな人だと思いますね。実際に信奉者は教祖的な崇敬心を持っていると思うんです。

もう一人、飯田史彦さんという方もいます。ご存じの方いらっしゃいますか。福島大学の先生で、ネットで情報を発信し、書物でそういう霊的世界のことを言っている方です。その方も教祖に近い方だと思います。非常に見事に書いてあります。ですが、あの方たちが大事なメッセージを発する相手との間の関係は非常に薄い。決して人間的な交わりにはならない。メディア的な、マスメディア的な交わりです。飯田さんは時々講演会をなさる。そして音楽もなさる。江原さんもそうです。また、握手はする。しかし決して対話はしないし、個人的な指導はしない。だから読者は手紙は書いていいんだけど、会いに来ちゃいけないというわけです。これは非常に現代的で、ある意味では責任を持たないということだと思いますね。ですから発信はするけれども、責任は持たないような体制になっている。それが非常に大きな問題です。ですからメディアがああいう情報を流すと、人生観に深く関わるような問題を、責任を取らないような体制で、いわば垂れ流している。それは大いに問題だと思っています。

それは江原さんという人がもし一対一でやったならば、大変心強い相談相手になるのではないかということと、美輪さんならもっとそうかもしれないけれども、そういうことと、現在彼らが活躍しているあり方という

のはそぐわないのではないかというふうなことを思っています。いずれにしろ、孤独な社会の病理みたいなどころがある現象だと思いますね。

**質問6** 生きるということに対してですね、個人を支えるということが大事だという先生のお話はよく分かりました。実は私の実の妹が筋委縮症に罹っているんですよ。それで現代の医学ではもう治すことができないと言われていたらしいんです。どんどんどんどんそれが進行しましてね。今寝たつきりで食べ物も食べられないで腹の脇から液体を注入しています。最近言葉も言葉にならないほど進行しているんです。

そういう時に個人の支えというのがないんですね。それで夜になると、自分が思うようにならなくて泣いたりするんですよ。そういう場合に、先生のそのスピリチュアリズムという、そういうのを活用するということができないでしょうか。

**島 蘭** ちょうど私の身近にも似たような立場の方がおられます。その方の場合は、その夫の方がそういう病気で、奥さんが私の近くで仕事をしているという方なんです。その奥さんのほうをできるだけ応援する。それで我々の大学院生などもいろんな形で応援する。お見舞いに行くということが良いことかどうかわからないんですけども、例えばその方が仕事に來れない時は、別の人がかわりに来る。そしてその人の奥様がいろいろ悩んでいることについて話し相手になる。そういうことをやっている。そしてその方の場合は近所のボランティアの方がいろんな形で手伝いに來られるらしいです。そういう時代になっていると思います。では近所の方はどういうモチベーションでやっているのか。宗教を持っている方もいるでしょうし、普通の道徳心でなさっている方もあるでしょう。しかしそういう方たちを支えているものの中には、何かスピリチュアリティと言っているような、宗教というほどにシステム化されていないけれども、何か大事なものがあるということを信じて、その信念でそういう援助ということをしている方がたくさんおられると思うんですね。

そしてそういう方たちの交わりを助けているいろんな文化がある。映画だとか小説だとかですね、そういうふうにあります。またインターネットがあるとしますね。そういう病気の人、特定の病気で苦しんでいる人は、たいてい患者さんや周りの人たちが情報公開しあっています。そういうことがすごく今は大事になっていると思います。ですからそういうつながり

を周りから応援する。つまり自発的にできてくるつながりに容易にアクセスできるような社会の仕組みを作っていくということです。これはアメリカは得意なんですね。アメリカは元々教会というものがそういうふうにも自発的に作られるものであり、いろんな人助けの組織を作る社会システムなのです。アメリカはそれを世界に広めたいので、新自由主義みたいな思想が広まっているというところもあると思うのです。

日本の場合は親族組織で昔やっていたことを、ややアメリカ風の自発的なつながりを皆で支えるというか、そういうタイプのやり方に今変えていく途上にあるんじゃないかと思います。さぞかし本当にご心配なことだと思います。お大事にどうぞ。

**質問7** 本日はありがとうございました。先ほど学生さん、これ東京大学の学生さんでしょうか、自殺を考えたことがあるかという質問に対して、相当数の手が上がるというようなお話もありました。現に自殺自体が、若者に非常に多いということを知っています。普段、学生、若者とも接していらっしゃる先生に、敢えて若者の死生観ということで、もう一段深く教えていただきたいなという部分がありました。

最近、直近で秋葉原の事件がありましたですね。人を殺して自分も逝っちゃうんだみたいな、そんな気持ちがあったなどと報道されていますけれども、ああいう学生も県でナンバーワンの進学校で、ずうっと勉強してというところがあって、非常に現代の何と云うんでしょうか、教育とかそういう部分での社会問題、病巣みたいなのが非常に表れている事件だなと思います。そのへんとですね、若者のそういう、現代の若者に絞ったその死生観みたいなところで、社会問題との関係にちょっと照らし合わせて、先生のお考えを少しお聞きできればなと思います。よろしく願いいたします。

**島菌** さっきの『バカボン』の話なんですが、やはり若者には死ということが近くなっている。ある意味で近くなっている。何と云うか、すぐそういう話にいくということですね。輪廻転生もそうですが、それはまた孤独な魂というものをすごく意識している。それは周りから受け容れられないという感じで、ひねくれているというか、被害妄想になっているというか、非常に自己中心的な、自分しかいない世界を作っちゃっている。そのことと死が近いということがどこかつながっているという感じがするん

ですね。

これは例えばイスラム教徒の留学生と話すとやっぱり違うなと思います。自殺は神に禁止されているという世界とだいぶ違う。これはやっぱり日本文化の弱点。どこか自分の命を軽く見てしまうところがある、ということを考えなくてはならないと思います。

しかし若者が何故自分の命を軽く考え、あるいは人を殺してもいいと思うかという、社会全体がそういうメッセージを送っている。人の命はそんなに重いものではないよとか、役に立たない命は必要がないよというふうなメッセージを送っているのではないかと思うのです。これは先進国全般に言えると思うのですけれども。

子供の頃から「あなた勉強しなさい、勉強しなさい」と、社会で少しでも良い地位を得ないとあなたの人生は価値のないものになってしまうと、あらゆる方面から子供の時から徹底的にたたき込まれている。そのようなことがあるので、そこを何とかしないとけません。若者の自己中心性だけに責任を帰することはできない。社会の方の責任ということがあると思いますね。何よりも何かできることがある。それから人と一緒に生きているということにこんなに素晴らしい価値があるという経験が得られるような、そういう環境を作っていくということが大事だろうと思います。

ボランティアなんていうのを経験すると、ガラッと変わったりする子がいますよね。ちょっと話しかければ良かったのになあとということがあるんです。あの時に一言言えなかったためにこんなことになってしまったということがある。ですから人間は弱いはかないものだと思うんですけれども、それだけにできることもあるというふうに思います。

**質問8** どうもありがとうございました。戦前から戦後にかけての死生観ということで、少し何となく整理できるというか、そんな感じがいたしました。

最後にまとめられたところで質問させていただきたいと思いますけれども。武士道ということで、潔い死というようなことを言われました。あともう一つ、生きたいということですね。お父さまが死ぬ間に「生きたい」ということを言われたということで、そこにもっと共同体といいますか、家族との一体感のようなものを求めていたということですね。先生は、そこではっきり二つに分けて説明されたような気がしたんですね。後者の方

が、これからの死生観として認められるんじゃないかというふうに受け止めましたけれども。

結局どちらもやはり皆と一体になりたいわけですよ。結局、潔い死も、そこに美意識というものがあって、やっぱり精神というものを後の人たちに残そうという気持ちがそこに働いていると思うんですね。これは自分の肉体が減んでも、自分が考えたものを後の人に伝えなければいけないという信念のようなものがあるんだろうと思うんですね。そこには美意識というものが働いていて、肉体は減んでも精神は残るというような感じはあると思うんですが。

後、病院のお話がちょっとありました。僕の母も亡くなる間に、まだ生きたいというようなことを言っていたので、個人的にはですね、そのお話は分かるし、人間には肉体が減ぶということに対する恐怖というのは当然あるわけで、やはりそれを永遠に周りの人たちと一緒に過ごしたいという願望はあるわけです。ただこの場合は、肉体の存続を願望しているということで、精神ということとはちょっと違うんじゃないかなと思います。同じ、皆といたいという、共存したいということがあっても、片方に精神があり、片方に肉体というものがあるんじゃないかなということですね。いずれにしても僕はどういう形で遺すかということが、個人にとって必要なことかなと思います。死生観は個人的なものだということを先生はおっしゃっていましたけれども、それにつながるかなと思うのです。

先ほど先輩の方が、死ぬ思いをしたけれども、戦後に帰ってきて、その現実を見て、死んでいれば良かったと思ったというようなことを言われていましたけれども、これはまさに美意識の問題だと思うんですね。現実の世界が自分のもっている美意識というものを覆すような状況になってきた時には、やはり何らかの形で自分の考えを、精神を残さなきゃいけないというようなことも出てくるんじゃないかなと思います。

そこで先ほどの武士道というか潔い死というものとのつながってくるんじゃないかなということですね。実際に今の社会が資本主義社会であって、物質中心的社会ということになってくるとですね、今までのような家族と連帯できるようなそういう社会というのは段々崩壊してきて、やはり個人々が生きざるを得ない。そういう状況がありますよね。その時にその絆というのはどういうふうにあればいいのかということになると、僕は今、

イスラム教が強くなっているという一つの要因はそこにあると思います。同じ絆でも精神の絆がある。日本にはその絆が何もないというようなことで、先ほどこいわれた若者の殺人とかいろんな問題が出てきています。最終的には何か絆をつくる。あるいは日本の例で言えば美意識というものをもっと構築していく必要があるような気がするんです。その欠如がやはり全体の絆を薄めていると思います。

美意識があれば、あるいは団結があれば、何か辛いことがあっても、孤独も過去のものとなって、思い出になって打ち消されるわけですから。何かそういう団結とか絆を深めるためのものを、もうちょっと構築していけばいいんじゃないかなと、ちらっと思いましたけれども、先生のご意見をお願いいたします。

**島 菌** 私は、共同体ということをかなり強調したと思うんですけども。絆とかつながりという時は必ずしも共同体だけではないし、それから精神的な絆、つながりというのが大事ではないかなと思います。それには具体的に誰と誰がということよりも、それも含めてですが、理念みたいな、基が大事だということですが、おっしゃる通りだと思いますね。

ある時期から学生が、武士道ということにすごくポジティブになったので、どうしてだろうと思っていたら、映画で「ラストサムライ」というのが流行ったんですね。「ラストサムライ」という映画はハリウッド映画です。企画はアメリカ人が作って、役者は日本人ですが、日本の明治後のサムライスピリットを非常に美しく描いている。それに連れて武士道ブームみたいなのが広がったんですね。つまりそれはサムライスピリットはグローバルに見てなかなか魅力があるんだなということでもあると思うんですね。ですからサムライスピリットの中の大事なものを再評価するというか、現代的に活かし直すということは考えるべきだと思います。

しかしサムライスピリット、潔い死の中には、例えば心の中みみたいなものが日本の伝統の中にはあってですね、とにかく早く死ぬことを美しいとするものがあり過ぎるなという気がするんですが。サムライスピリットの中でも、これははっきり検討されていないと思うんですね。おそらく浄土教と非常に深い関わりがあります。『一言芳談』なんていうのがありますが、その中世の文献、浄土教文献の中にも、とにかく早く死んで極楽浄土へ行きたいという一心になることを勧めています。浄土のためにすべてを

惜しまず、もっぱら浄土だけを考えることがプラスだということです。これは日本の浄土教の一つの特徴ですが、どこかで潔い死とつながっていると思うんですね。これは江戸時代の武士道書である『葉隠』の世界というのが、どういう宗教的な背景で形成されているかというようなことを検討してみなくてはいけないと思います。日本の浄土教は、末法思想に則って仏教をある種の形に持っていったのですけれども、その浄土教において人とつながりとか社会というものがどういうふうに理解されているかということを検討する必要があると思います。そういうことがなされていない。つまり武士道というのは美的に美しいんですが、その倫理的な意味とか社会的な意味みたいなことはあまり検討されていない。歴史的に果たした役割というようなことも十分に理解されていないのではないかと思います。

そこへいくと、キリスト教の伝統というのは、いろんな理屈をこねて、ああじゃない、こうじゃない、良い悪いと言って議論している。そのへんの議論が日本の精神的伝統にはやや弱いんじゃないかと思います。

そういう意味では、おっしゃったことに大体賛成なんですが、そういう精神的な伝統とのつながりを強めるためにはやっぱりそれを自覚的に考察する、反省し議論し記録するというか、そういうことが必要だと思うんですね。武士道ブームにはそれが弱いなというふうに思っています。それからつながりという場合には、確かに武士道の中にあつたような孤独に耐えるというような精神、そういうのが必要だということにもまあ賛成です。

しかし相変わらず、日本の文化の中ではしっかりとした自立心を持つということが弱い面がある。私も今日の話では、絆ということを強調したわけですが、そのことと自立心をしっかり持つということがどうやって両立できるかということが相変わらず大きな問題だと思っています。

**質問9** 本日は大変充実した内容で非常に日本の明治以降、あるいはそれ以前からの宗教観というものの変遷を明確にさせていただいて感謝しております。

一つお伺いしたかったのは、戦中派の非常に悲惨な経験をいろいろ踏まえた上での話でございますけれども、その次の世代になりますと、これは多分私ぐらいの世代が中心だと思うんですけれども、戦前も知っているし戦後も知っているということなんですけれども。それは何か現世主義的というふうな表題でまとめられたことに、ちょっと抵抗感がございます、



これは日本の感覚でいいのかもしれないんですけども、そもそも現世と来世という明確な区別というのは果たして日本の宗教観にあるのかどうかということでございます。キリスト教あるいはそれに遡るギリシアのプラトン主義あたりから、この世とあの世の区別というのは明確になってきます。もしこれを英訳されると、外国の方には誤解を招くのでないかと思うんです。

先生がいろいろおっしゃっていますことは、ある意味ではそのような見方を訂正するようなことかも知れません。生命主義的救済観とか、それから宇宙の本体とか、そういうようなことをおっしゃいました。それから死者との親しみの感覚ともいわれました。その生命主義的救済観というのは、この世的な生命だけではなくて、日本人が持っている生命観というのは非常に昔から、あるいは神道なんかとも結びついたのであるかもしれませんが、神道では、私も詳しくないんですけども、現世（うつしよ）と幽世（かくりよ）でございますか。何か一応区別はあるけれども、重なり合っているというか、融合しているというか。仏教なんかでも、消滅する世界と、それから真実の世界というのが一ではないけれども、異なっている。そういう非常に独自の考え方でございますね。ヨーロッパの考え方を図式化するとすると、縦に上と下と別れるという感じですけども、そういうふうに図式化できない。何かそういうことを踏まえないといろいろ誤解を招くと思うんです。

私も親を亡くしましたし、知人たちも生涯の伴侶を亡くしたり、いろいろな方がいるわけですけども。遺族の方に聞くと、何か不思議と、それは特別な傾向のある人たちと付き合っていることなのかもしれないですけども、私が中学の時に同級だった女性でクラスメートだった方が、20年ぐらい前に癌で6年ばかり大変苦しまれて、そして亡くなったんです。ご主人が本当によく最後まで介護されました。大手術だったそうですけれども、ご主人はその時既にお医者さんに、寿命はこれこれの長さだと聞かされたそうです。しかし絶対に奥さんに言わなかったそうです。それでも最後まで本当によく看取られて、感心していたんです。もう亡くなってから20年ぐらいになるのに、今でもその奥さんといつも話をしているというんですね。それでお子さんは残念ながらいらっしゃらなくて、私よりも10年も上の方なんですけれども、病気一つしない。日蓮宗でいらしたので、最近は

割といろいろとその系統のお寺巡りをされたりすると、いつでもその奥さまと一緒にいるという感じで過ごしていらっしやるんです。似たようなことはいろいろあるわけです。何かの時に亡くなった親が交通事故直前に助けてくれたとか。そんなことを非常によく耳にします。今生きている人にとっては亡くなった人というのは生き続けているわけでございますね。

それに対して私が非常に尊敬するドイツ人の学者、哲学者の方を知っているんですけども、私も存じあげていた奥様と本当に仲の良いご夫婦だったんですけども、奥様が数年前に亡くなったんです。今だにですね、奥様がないからもう研究する意欲も出ないとかこぼしてこられるんです。私は、「いや日本ではこうなんですよ」なんていうお手紙を差し上げるんですけども、それでもなかなか立ち直れなくて、それで最近の「千の風になって」をお送りをしたんです。英語版がございますので。そしたらちょっと元気が出られたんですね。お墓参り行かれたりしたそうです。でも、その後またいろいろご不自由をおっしゃってくるんですね。

その先生はギリシア哲学もご存じなので、ギリシア、プロテスタントあたりがご専門なんです。カトリックの信者で、カトリックの教会でパイプオルガンなどもずっと弾いていらしたんです。やっぱりキリスト教では、死後の世界というのは遠いんですね。何かある意味じゃ気の毒だなと思います。生命主義的救済観というか、宇宙的生命観というのは、ずうっと近世、近代以降のキリスト教には希薄だと思うんです。それでも例えば神秘主義、ヨークの神秘思想なんかを見ると、死を超えているんですね。例えばエックハルトあたりのを見ても、十字架にかけられるということは飛ばしているんですね。神秘主義はそういう受難とか、死をどうとらえているのか。とにかく生命しかないんですよ。もしかしたらそれは逃げではなくてですね、確信だったんじゃないかと思うんですね。永遠の生命というのが、この目に見える世界だけではなくて、やはり目に見えない世界を貫いていて、そしてそれに気付くということが真実であり、本当の救済はおそらくそこへつながってくるんじゃないかと思います。

それで私はいろいろ死生観を扱うということは、それは非常に大事だと思っています。多様な社会の中でいろいろと対応の仕方が違うと思います。最後に先生は、死の意味についておっしゃいましたね。宗教といっても多様な表れだけでなく、根本にある何かを、アジア的と言ってもいいんです

けれども、あるいはそれは普遍的かもしれないけれども、そういうものを明確にさせていただけるとありがたいと思います。失礼しました。

**島 蘭** お墓参りはアメリカ人はあまり行かないですね。しかしメキシコ人はかなり行くんじゃないかと思います。それから「万聖節」と「万霊節」というのがあるんですね。その日はお墓参りに行くことになっている。カトリックや、たぶん正教会、オーソドックスもそうですが、もっと死者が近い世界があったんじゃないかと思うんですね。これはやっぱりプロテスタントが生者と死者の間をピッと分けた。そういうことがあったと思います。もちろん元々はキリスト教にそういう側面があったと思います。私、シナゴグへ行きました。ヨムキプールの時に連れて行ってもらったんです。アメリカでですね。その時にその一年に死んだ方の名前を全部読み挙げて、その遺族の方が立つ。それから過越しの祭りの時はですね、父祖から伝えられた教えを、つまりモーゼが同朋をエジプトから救い出したという物語を語るわけです。ユダヤ人の場合は同朋意識が強く、その同朋意識は大昔から未来へつながっている。だから同じ一神教といってもユダヤ教はかなり世代の連続感が強いし、カトリックもそういう面があります。ですからプロテスタントというのがちょっと特殊な、歴史の異変をつくったのではと思います。これはマックス・ウェーバーあたりもそういう考え方があります。

デーケン先生は死生学を日本に広めた方ですが、あの方はカトリックです。十何歳の時に兄弟姉妹の一人が亡くなった。その時に死について考えて、亡くなった時には家族がまた一緒になれるという気持ちがいかに慰めになったかと言っています。死んだら家族一緒になれるかとキリスト教徒の方に聞くといろいろなんです。いやそんなのではないよと、みんな平等だから、別に家族だから近いということはないんだという人と、カトリックの人は大体、家族一緒になれると言うんですよ。モルモン教はもっとそうです。

ですから、むしろ共通の基盤はですね、むしろ死んでも絆がつながっているという感覚です。こっちの方が人類の長い歴史を踏まえている。宗教の中にはいろんな異変が起こるので、そういう偶像崇拜の否定みたいなものがある方向へいくと、そういうものを否定する。

これはヨーロッパの近代に起こったことなんですが、東アジアでも儒教

がややそれに似たようなことをやったんじゃないかと思います。東アジアの近世儒教は非常に現世主義的で、この『論語』の中に「いづくんぞ、死を知らん」という言葉があります。要するに生きえ分からないのに、何故死のことを考える余裕があるかというわけです。そういう思想を少なくとも知識人はかなり真に受けている。しかし朝鮮では、朱子が規定した、非常に丁寧な死者儀礼を真に受けてやっている。そういう矛盾の関係にあるんですね。日本の場合はそれは仏教に任せて民衆は熱心にやっている。しかし知識人の方はやっぱりある種の現世主義のほうにいつてしまった。

まあですから、すぐ近くに向こうの世界があるという、ある意味では人類普遍の精神世界を近代文化は西ヨーロッパを中心に否定してきた。それに東アジアはある程度乗ったとか、あるいはむしろ同時進行をしたといってもいい。そういうところがあるんじゃないだろうか、そういうふうに思います。

それからもう一つは、現代はグローバルにそういうことが進行しているということがいえます。一人ひとりが自分で道を見つけないと、共通の文化として死者が近い文化というのを見つけられないといけない。そういうことなので、戦後の現世主義というのは、一面しか見ていないということに私も気が付いたということなんです。つまりその時代に実はこんなに死者儀礼がなされていたんじゃないかということがあります。おっしゃることはその通りだと思うんですけども、私としては一応いくらか弁解はあるということをお言います。

**質問10** 私は韓国から参りました。今日は日本人の救済観、死生観について伺いましたけれども、救済観と死生観は宗教と強く結びついているような気がします。今、日本の宗教には、古代からの、仏教、儒教とか神道とかというものの影響が非常に強く残っているような気がします。

その中で今の日本人の死生観というか救済観に影響を与えている普遍的な宗教は何だろうというのが一つの質問です。先生のお話を聞くと、いつか読んだ『城の崎にて』という小説が心に浮かんできました。ご存じの通り、蜂の死を見て感じた話。日本の方々はどういうふうに死を見ているか。死についての諦観とか認め方とか、そういうものですね、日本人の今の宗教がどうかかわっているのか、例えば生きて神道、死んで仏教なら、今の日本人の死生観と救済観に影響を与えているものは何だろうかと思いま

す。

それで先生も少し触れてくださいましたけれども、例えば日本の集団的な犠牲といましようか、例えば個人的な必然的な死じゃなくて、権力によって強いられた集団的な死、いわゆる戦争ですね。そういうことについて先生がさっきご紹介くださったのは、近代から現代までの優れた学者のお書きになられた本を中心としてその流れを教えてくださいましたけれども、私の興味があるのは、日本人の全般的な死生観は何だろうかということです。死生観じゃなくて生死観とも言えるかも知れませんが、日本人は生きていることよりも、死ぬことをまず考えるのか。そうじゃなくて今の日本人にいろんな精神的な影響を与えている神道というのは、死んだ後の世界を含めていないんじゃないかという気がします。

**島 菌** 神道にも、またいろいろあります。今日ちょっと天理教の話をしました。天理教の場合は、死んだらば神さまの元へ戻るのです。だけれどもまたこっちへ出てくるので、死後の世界というのは一応あるけれども、あまり重んじない。こっちへ出てくるということを重んじる。これはまあ現世主義的ということですね。

しかし神道の中にこのパターンだけかと言うと、さっき先生がおっしゃったように幽世的な、これは近代になると霊界と言ったりしますが、すぐ近くにもう一つの世界があるという考え方もあります。これは行き来はできる。ですからテレビでもしょっちゅうそういう霊能者が出てきて、死者のメッセージを伝えるというふうなことがなされる。これは神道的な伝統よりもむしろ folk religion 的な民俗宗教的な伝統の中にある。韓国ではムンダムの伝統に近いようなものじゃないかなというふうに思うんですね。

日本の場合はやはり韓国よりも浄土教の影響が非常に大きいと思うんですね。ですからある時期から浄土教に従って死を考える。死んだら仏になるという、この意識はかなり広まって、今でも大きな影響を持っていると思うんですね。

しかしその浄土教の場合は、遠い西方極楽浄土に行くはずなんですが、しかし熱心に供養するので、死者のためにいろんな儀礼をする仏教でもあるわけですね。ですからこれが神道とは別に非常に重い流れを作っている、そういうふうに思います。

それともう一つはですね、その浄土教、これはまた無常という考え方も

関係するんです。無常というのは、本当に世界中にある考えだと思うんですけども、日本ではやっぱり仏教と結びつき、そして芸術、芸能の中に非常に広く行きわたっているのです。例えば短歌を作る、俳句を作る、さっきの一茶がそこにつながってくる。あるいはそれこそお花見をするというのは、仏教的なものに影響を受けた無常観が美的に表現されている世界だと思うんですね。ですから日本の場合は、そもそも死生観や救済観がやや美学化されて、それだけ宗教者があまり尊敬されない。そういう美的な享受の中で感じ取るというところがあるんじゃないかと思います。

それはですね、ある意味では教条主義にならない、そういうリゴリズムにならないという美点を持っているけれども、今日のご質問の中にもあったように、ちょっと芯がしっかりしない。理屈を筋立てて通すという人が少ないわけだから。そのためにどうしても集団主義に馴染んでしまうというふうなところがあるんじゃないか。芯を通して、宗教の論理を通すという伝統が弱い。これは浄土教でも、末法思想というのはそもそも、芯の通るような宗教は成り立たないという思想なのです。それが一つ、日本の特徴になっているんじゃないかと思います。

**質問11** その浄土教というのはいつから入ってくるんですか。何世紀に。

**島菌** これは結構早いと思いますね。最初からあるのかもしれませんが、8世紀、9世紀には相当の力を持っていると思います。

**質問12** 8世紀と9世紀とすると、天台宗と真言宗が入ってくるのと、ほとんど同時に入るんでしょうか。もうちょっと遅いんじゃないんでしょうか。

**島菌** 浄土教が広まるのは平安のある時期ですけれども、浄土という考えは大乗仏教のかなり広い基盤と共にありました。

**質問13** 浄土教に非常に興味を持つのは、私がユネスコにいた時にシルクロード調査というのをやったからです。浄土思想というのは完全にシルクロードの産物です。西方にあった天国の思想、救済の思想がシルクロードを通して、仏教と合体して入ってくるわけです。だからその浄土思想で救済、死んで天国に行くこと、キリスト教徒だったら聖人になるとか、そういうことと仏になるというのはほんの紙一重のところにある。あれこそが文明間の対話なんですよ。浄土宗という文明間の対話の産物が日本に入ってくる。法然あたりで確立するんでしょうかね。

島菌 いや天台の修行の中にも念仏があります。

質問14 いや、念仏はありますけれども、浄土という考えはどうでしょうか。

島菌 そうですね、浄土教的なパラダイスはいろんな意味で西欧的、一神教的なパラダイスと違うと私は思います。

質問15 「阿弥陀浄土図」というのは敦煌の莫高窟に現われますね。しかしそれが現れるのは、初期の莫高窟じゃないと記憶しています。浄土は阿弥陀浄土図として提示されているから、阿弥陀という仏さまが現れなければいけないということがあります。ところが阿弥陀にはアマターバとアマターユスという呼び方があるじゃないですか。

島菌 そういう救済仏という考え方は、大乘仏教の本当の初期からあるのもっともっと遡りますよね。

質問16 まあ源信がいますよね、法然の前に源信がいる。もっと前でしよう、本当に入って来たのはもっと前だと思う。

島菌 最澄はそういう天台の修行を持ってきますけれども、その中には念仏が入って、浄土を観想するというのが入っていますので。

質問17 多分そうでしょうね。入ってくると思います。それを受けているわけだから。ですからそうでしょうね、きっと。

島菌 日本の浄土教で大事なものは、末法思想と結びついていて、誰でも救われるので、審判ということはからんでいるんだけれども、厳格な審判じゃないということです。ですから悪を犯しても救われるということになってくる。

質問18 そうすると親鸞ですね。

島菌 でもそれはもう浄土教全体にあることで、それはまた戒律を否定するということにもつながっています。

質問19 親鸞の「悪人正機」というあの考え方は、「悪人においておや」というのがあるから、「悪人でも」じゃないんですよ。

島菌 「悪人でも」じゃないです。

質問20 「ましてや悪人において」ということですね。カトリックで言うと、あれはフェリックス・クルーパーという考え方です。フェリックス・クルーパーというのはある意味、悪人正機ですよ。

質問21 ああ、そうですか。

質問22 幸いなる罪ということですか。

質問23 ああ、なるほどね。

島 藺 要するに、日本の浄土教の特徴が、末法思想だということは、この世に対する責任がなくなるといふか、薄くなっているということがあります。ですからやや逃避的ということですね。仏教全体にそういう傾向があるとされるかもしれませんが。戒律を守ることによって、ある種の社会に対する責任を負うというのが元来の仏教だとすると、戒律を否定したということは、そういう堅固な生活を送ることによって、この世の秩序と違う秩序をつくるという宗教の持っているある傾向を否定したところが、日本の仏教にはある。その代わりに庶民に入ったんですね。

それは聖と俗の区分が、何か柔らかい緩いものになったということでもあると思うんですね。これは日本の仏教は聖（ひじり）の仏教だと。だから西行は「遁世」と言うんですけども、そもそも僧になることが遁世のはずなんですけど、大体僧侶の集団というのがあまりに世俗的なので、そこからもう一回出るということですか。しかしそのためにはまた民衆に近づかなければならないので、民衆のために芸能をやったり、いろんな勧進ということをやったり、そういうことですね。ですから西行はおそらく結婚もして、短歌を作るというのはそういう貴族社会に入りましたし、勧進帳の世界ですね。

質問24 西行自身は武士じゃないですか。

島 藺 元々武士ですが、出家をしたら非常に純潔な俗から離れた聖なる生活をしたかということ、聖（ひじり）の生活というのはある意味じゃものすごく俗な生活で民衆に近い。また、芸術とか芸能に近いといふか、そういうところに日本の宗教性が見られます。

質問25 高野聖とかですか。

島 藺 そういうタイプの宗教が今だに続いている。俗に馴染んで美的なものに近い、そういう宗教意識というのが続いている。

それでさっき『一言芳談』という本の話をしたんですが、まさに高野聖の文献なんですよ。これはですね、小林秀雄が「無常ということ」という文章を戦争中に書きましたけれども、それはこの本を引いているんですよ。私はあの文章はやや怪しい文章だと思うんです。つまり潔い死ということを褒めているのではないかと。戦争中にそういう発言をせざるを得なかった



ということでしょうが、それにしても威張っていますからね、あの人は。

**質問26** せざるを得なかったというのはあるんですよ。

**島菌** そういうことはありますが、小林秀雄は、いんちきがたくさんあるから。本当に、批判的に読んだ方がいいと思う。でも今日は小林秀雄の話ではないから。

**質問27** ありがとうございます。非常に重いテーマで、しかし非常に私は感動いたしました。

葬儀の在り方、葬儀の仕方といいたししょうか。先ほどの話の中でも死者の魂の供養とかですね、あるいは祖霊の供養とかございました。「千の風になって」という歌の話をされたんですけども、元来日本人というのは非常にアニミスティックな世界に生きていますと私は思っています、そして組織宗教が入ってきて、いつの間にか組織宗教によって葬儀というのが牛耳られるようになりました。しかしよく考えてみると、例えば子供たちがよく見る宮崎駿のアニメがございますね。「トトロ」、あるいはこの「千の風になって」もそうなんですけれども、非常にアニミスティックな世界がある。おそらく葬儀の在り方というのも、今後変わってくるんじゃないか。例えば樹木葬とかそういうことがございます。要するに今までの伝統的な慰められ方では収まりがつかないところが、実は日本人の心の奥底にあって、そういうものに最近気付き始めてきている。例えばインターネット葬とかですね。今後どういうふうな方向に行くのかということをお教えいただければと思います。

**島菌** 日本の仏教は見事な展開だったんじゃないかと思うんですね。アニミスティックなそういう死者との連続性の意識みたいなものを見事に取り込んだ。これはまた中国でもやったし、もちろん韓国もやったんでしょうが、日本の仏教はそれを徹底してやった。これは一つは檀家制度がありますよね。無理やりくっ付けたということがあります。ですから仏教はアニミスティックなものを排除しないで、むしろ保存したということがあるんですね。仏教のお陰で保存されたということです。

ですから今、韓国には、チェサという死者のための儀礼がありますが、急速に衰えていると思います。おそらく日本の方が、仏教教団がやっているのだしとい。韓国では親族が儒教式にやっているわけです。日本では仏教が関わって長い間やってきたので、おそらくその方が保たれる傾向が

強い。

**質問28** 韓国はこの頃はキリスト教がはやっていますね。

**島菌** ですからキリスト教がはやる一つの理由は、チェサをやらなくてすむから、という話も聞いていますが。

**質問29** それだけではないんですけれども。例えば若者たちは祭祀なんかしたくないのは事実です。

**島菌** それから火葬が今、世界的に広まっていますから、韓国のお墓の在り方はがらっと変わってきているし、カトリック圏も火葬が広まるということで大変な変化をすると思います。それに比べると日本は、変化の仕方はややゆっくりになるのかもしれない。もちろん自然葬や樹木葬、それからさっきの合同墓みたいな、そういうのが広がってくると思いますけれども。

**質問30** それで今のことで、葬儀の後のお墓とか祖先祭祀のことなんですけれども。今、私の父が2年前に亡くなりました。去年お墓を作ったんですが、今の新しい霊園には伝統的なお墓はほとんどなく、洋式の横型で「ありがとう」とか「愛」とか刻まれているお墓は、イメージでいうと7対3ぐらいで新しい型が多いです。これは非常にヨーロッパ的な欧米的な、まさに個人墓に近いようなお墓がずいぶん増えてきているなと思いました。

それで今日お話に出た、縦の命のつながりということに関連して、これはモラロジーの中でも非常に重視されている考え方なんですけれども。それと祖先祭祀との間の関係についてですが、ある意味で祖先祭祀が受け継がれていく、あるいは受け継がれなければいけない義務という形で、いわゆるお墓のお守りだとか、仏壇のお守りであるというのが、ある種縦の命のつながりを保障していた部分というのがあると思うんです。しかし、現実の問題として、私たちの世代になってくると少子化で、長男長女の結婚、一人っ子同士の結婚とかということで、祖先祭祀を受け継ぐことがかなり難しくなってくる。一つの質問は、まず既存の仏教集団の中で、こういう結婚に対して何らかの方針というのを打ち出しているようなところというのは、先生のご存じの限りであるかどうかということと、それからそういう形での祖先祭祀が受け継がれない場合、今日の桜の話というのは非常に印象的で、私はこういう事例というのはやっぱりエコロジーとか、環境問題を考えても非常に重要だと思うんですけれども、何か他の形でその縦の命

というのを担保していくというのは可能なのだろうか。ちょっと先生のご意見をお伺いしたいと思います。

**島菌** 仏教教団の方とお話する時には言うんですが、我々までは死者が増えます。私は80歳、85まで生きないような気がしていますが、そのぐらいまではとにかく死者の数が増えると思います。その後、人口カーブがぐっと減るので、確実に葬儀による収入は減る。それからもう既に、御布施の額がどんどん減っていると思います。何であんなに戒名料あげなければいけないのかということについては、今の人は皆しっかり考えるから、今までのやり方では仏教教団は持たない。実際にお寺側もいろんなことをやっていますよね。個人墓をやっているのもその一つです。

それから上田紀行さんという人が『がんばれ仏教』という本を書いています。あそこに出てくるのは、もっと社会活動をやる。そういう形でとにかく人との接触をつくっていかなければ駄目だ。Engaged Buddhismという言葉が今使われています。社会参加仏教ですね。これはまた同時にそれは日本の仏教がアジアや西洋の仏教に影響を受ける時代になってきたということです。アジアや西洋の仏教のやり方を真似るんですね。台湾の慈濟会というのは巨大な慈善団体ですね。そういうやり方をおそらく真似するようになってくるだろうと思います。それでも辛いと思いますね。でもそういうふうにして仏教教団は弱ってくるに違いないのですが、にもかかわらず日本人の死の意識はずっと仏教と結びついていく面が強いと思います。

**質問31** 仏教教団の方からというのは、例えば具体的な家族のお墓のお守りであるとか仏壇のお守りに対して何らかの提案がありますでしょうか。つまり現実にはもうお墓を守れない家庭というのはたくさん出てくるわけですね。それに対して何らかの、両家墓とか、形では合同墓とか出てきていますけれども、どうも必ずしも是認というか、もう仕方なく認めている感じなのかなという感じがします。

**島菌** ですから個人墓の方へ少しシフトするとかいうことがあります。両方やる場合もあります。家のお墓もあるけれども、境内に個人墓的なスペースも作るというふうなことをやっている所もあります。

**質問32** 同意するという感じなんでしょうか。教団としては、お墓の守り方はどうすべきというのはあるのでしょうか。

**島菌** ある程度、ニーズに応じていかないと持たないということでしょうかね。

**質問33** よろしいですか。島菌先生が『現代救済宗教論』という本で、新宗教の諸類型を書いてみえますよね。その中にモラロジーが入っているじゃないですか。それが今日示された現世主義的な宗教性という、ここの欄に入っていないのは何故でしょうか。

**島菌** 実践倫理宏正会というのも似ている。修養団体で、新宗教とも近いけれども、一応広くとれば入るけれども、ちょっと迷うのはですね、実践倫理宏正会というのは、私は編者じゃないんですが、『新宗教事典』というのに、新宗教団体として入れたらその団体から宗教じゃありませんからという抗議がきたそうです。ですので当事者の意思も大事なので、モラロジーは宗教だと言うとですね、違うよと言われる。叱られるんじゃないかなと思います。

**質問34** 本の方に入っていますから。

**島菌** ただ廣池千九郎はやはり救いということをおっしゃっていると思いますね。ですから修養運動というには宗教的な面がかなりあるし、もちろん宗教の重要性というのはしばしば説いておられると思いますが。

**質問35** モラロジーはつまりキリスト教徒もいるし、仏教徒もいるし、すべての宗教、神道の方もいるし、それらすべてを尊重しているわけですよ。やっぱりこれを、例えば立正佼成会にしても、天理教にしても、ここに出てくるものではそういう現象は起こらない。創価学会も一つの完全な宗教と言えらると思うんですけども。

やはりモラロジーの持っている学問性というのは、そういう既存の宗教をすべて尊重しているというところにあるんじゃないか。だからそういう新しいセクトとして現われたならば、前の既存の宗教を否定して新しいセクトになっていることがありますでしょう。そういう点、どうお考えになりますか。

**島菌** 日本の宗教の場合は、そういうふうには他の存在を排除しない。共存できる。それからお互い包摂し合うという考え方を持ったものが非常に多いと思います。法華経的な仏教もですね、創価学会の場合は他は全部駄目だという考えですが、法華経の中にはすべてのものが入っているので、他の団体の知恵も尊ぶというふうな立場を取っているところがあります。も

ちろんそれからお葬式は仏教でやっても構わないというふうな神道系の宗教団体もたくさんありますね。ですからその点ではつながっている。確かに修養系の団体は宗教ではないということをはっきり打ち出すことによって、諸宗教との共存ということが強く出ていると思いますが、その共通の特徴はかなり他の日本の宗教団体にも出ている。

**質問36** 立正佼成会の場合、法華経が中心になっていますよね。しかしその中に、つまりキリスト教徒で立正佼成会員という人はいるわけですか。

**島菌** 生長の家はそうになっていますね。例えばブラジルの生長の家は、生長の家だけれども、カトリックだという人は非常に多いと思います。生長の家は一時期、自分たちは宗教じゃないと言っていたこともあったと思います。東洋哲学だといっていました。少なくともブラジルではそういう主張を持っている。それは生長の家は、「万教帰一」と言うと思いますが、もともと大本教が「万教同根」と言っていたので、その流れを引いています。ですからすべてのものを包容するというのは、日本のそういう宗教運動、修養運動に共通してあるような流れではないかと思います。

**質問37** ですからそれが全部の特徴で、すべてを飲みこんでいくベースにあるのはやっぱり神道的なものなんじゃないでしょうかね。立正佼成会の場合も非常に現世肯定的になっていますよ。しかし仏教そのものはインドにおいては、苦から逃れるために現世を肯定していなかったじゃないですか。苦からいかにして解脱するか、逃れるかというのが、一つの釈迦の教えであったわけですからね。仏教は、現世そのものを大肯定して始まっているものじゃない。これが日本に入ってくるとすべてが現世肯定になってくるわけですよ。

**島菌** まず最初の話ですが、そもそも中国の仏教も儒教の影響を相当受けて、三教一致というふうになって、一部は大変現世主義的になっていましたので、神道の影響というよりは東アジアの共通性と見たほうがよい面があります。もちろん日本に来て、もう一つそう言ったという面があるかもしれないけれども。

それからモラロジーの特徴は、やはり学者が始められた団体なので、学問を重視する特徴は他の新宗教にはあまりない。立正佼成会は小学校を出た方が始められたので、学問をすることは信仰の本来のものから離れるみたいな考え方があると思いますね。一つはそこですね。

それから、そのこととつながりますが、モラロジーは論理的に構成されているという側面から言うと、さっき言ったことの中には日本では論理を通すということをしないので、いろんなものがうやむやになる傾向があるということでしたが、それと違う方向を持っているんじゃないかなということが一つありますね。

**質問38** ありがとうございます。そういう問いを敢えてしたのは、道德科学研究センターがここにありまして、我々は最近、2度ぐらいの大きな国際会議をユネスコや国連大学を結んでやっているんですね。共同主催しています。それはもし宗教とか、新宗教とかセクトとかの方のカテゴリーに入っていたら絶対できないことなんです。つまりユネスコは特定の宗教との協力はしないんです。公平に見なきゃいけないから。だから共催というのが出来るというのは、ユネスコの方で道德科学研究センターを学術団体と見てくれているということなんです。ですからその点で、モラロジーは学問だとおっしゃっているのは、非常に正しいんですけども、こういう諸宗教の類型の中に一緒に出てくると、我々としては将来そういう国際機関とか、あるいは大きな大学との共催が難しくなってくる。

**島菌** 他の日本の修養団体なり、宗教団体なりみると、いろいろ工夫をしています。そもそもこんなにたくさんの団体に分かれてしまっているということが、これはアメリカがそうですが、日本の一つの特徴で、何でそうなったのかなということを考えておく必要があると思うんですね。

仏教教団が四分五裂になったということがすごく大きいと思うんですけども。これはまた法然が仕掛けたみたいなのところがあると思います。そうしますと、それぞれの団体は皆、小さな団体に過ぎなくなっちゃうわけです。小さな派に過ぎなく、セクトに過ぎなくなっちゃう。何とかしてセクトじゃない、ある種の普遍的な地位を求めようといろいろ工夫することになります。その中に他のものと包摂したり、協力するという、そういうパターンができてきたと思います。

**質問39** よろしいですか。中村元先生がですね、語源的には非常に独自なご解釈でしょうけれども、「宗教」という言葉を挙げて、「宗」というのは、いろんな宗教の根本の真理みたいのものであって、ただ必ずしも言葉で十分表現できるものでなくて、「教」の方が、いわゆるセクト的、それぞれの宗教の独自性をいうものであって、本来はその両方から成り立っていると

おっしゃいました。これからは、ユネスコのお話もありましたけれども、宗教の多様性ということも現実としては大事ですし、それぞれの民族に応じたあり方としても多様性は維持されるべきだと思わなければならないけれども、共通の面ですね。できれば宗教家じゃなくて、やっぱり宗教学者の方のご任務ではないかと思うのでございますけれども、その共通の面をはっきりさせていただく必要がある。宗教学だけじゃなくて哲学なんか非常に宗教と関わる点が多くて、特に諸宗教の接点をいくような、例えばハイデガーなんか本当にそうでございます。いろんな人がいるわけです。哲学者とか。そういうところからですね、宗教が嫌いだとか何とかって言う人も取り込めるような、論理性とか知的に納得のできる、だけでも具体的なあり方はどういうものかということについては、自分で選択する。何かそういうようなことで世界の宗教は手をつながなきゃならない時代だと思えます。

**質問40** それをやろうとしてパリのユネスコ本部でシンポジウムをやったんです。それについて本が出ましたけれども、その報告書で、発表者をご覧になると、カトリックの大司教が出ているわけですね。仏教の東大寺の長老も出ているわけですね。その頃の管長です。イスラムの大学者も出ているわけです。そういう人が出てやった会議、しかも聖俗の拮抗を巡る東西大会です。だから「聖俗」ということで、ちゃんと宗教を表に出してやったのがあの会議なんです。おっしゃるようにそこの接点、通底するものを探り出すことがねらいです。そういうことです。

**島菌** カトリックの方と話していると、やっぱり実は他を認めているように認めていないんだなと感じます。自分たちがすべてだと思っているんだなと愕然とすることがありますね。そこにいくと、日本人はあっさり、宗教というたくさんあるんだということに認め過ぎている。宗教という言葉がややそっちの方向に引っ張られて日本語になっちゃった。religion ということの中には the religion みたいなところがある。それが religions の方へいった。宗教というところごとそあって、皆、勝手なことを言っって勢力争いをしているという理解になっているんですね。むしろ道とか法とかいう言葉の方が、religion の元の意味には近いので、そういうものに皆が近づいているんだということなんです。

それからもう一つ、カトリックのことをけなしたので、もう一つけなしたいのは西洋哲学なんですから。西洋哲学をやっている人は、西洋人

は当然なんです、日本人の先生こそ頑張っていたきたいと思いますが、西洋哲学こそ哲学だと思っているんですね。

**質問41** 僕は全然そう思っていない。

**島菌** ですから先生のような方に、絶大なる共感を持つのはその点です。あんな哲学の意識はまるっきり時代錯誤だと思います。それこそ東洋の諸思想、もちろんイスラムもそうですが、そういうものを合わせてものを考えていくべきで、人類共通の哲学をつくっていくべきなのです。

**質問42** そうですよ、大賛成だな。今日のお話が大変良かったのは、歴史的に非常に精密な話であり、そしてそれを資料に基づいてきちっとやられていることで、非常に学問的にも本当に深い話であったことです。僕はずいぶん教わりましたよ。例えば加藤咄堂という人がいて、こうこうというようなところから始めて、井上哲次郎なんかにもいって、彼らの限界はどこかということが僕にも段々分かってきた。逆に共鳴を覚えたところというのは、やっぱり吉田満だな。これはやっぱり読まなきゃいかん。僕は読まなかった。『戦艦大和』。有名な本ですよ。死とは何かを本当に知るためには、立派に正しく愛を築いてこの世に生きねばならないんだと、こう言っているじゃないですか。これこそ正しい。これこそ本当の意味ある死を理解するキーワードですよ。正しく愛を築いて生きねばならぬ。それでなきゃ本当の死はないんだと言っている。だから、「忠君愛国ばんざい」、それから何だかんだ、こんなものに騙されてはいけないと言っていますね。これは彼の体験を経てここへきた本当に貴重な証言ですね。僕は、非常に感動をもって読みましたね、これを僕は全部読まなきゃいけない。

それからその次。その次いろんな重要なことがあったけれども、今、小田川先生が言われて、そして服部先生も言われて、最後に言われたように、西洋とか東洋とか言っているのは、もう21世紀じゃないよ。儒教が正しいの、仏教が正しいの、キリスト教、イスラムが正しいの、そんなこと言っていていいんだろうか。このことを根本的に問わなきゃいけない。それでじゃあお前さんはどう考えるかということで、先生に差し上げました本に書きましたけれども、そこには儒教を取り上げて、そして仏教取り上げて、キリスト教を取り上げて、ソクラテスのギリシア哲学も取り上げて、それを通して考える。その時に先生の「スピリチュアリズム」についての本をぜひ読まなきゃいけないと僕は思っている。それはどういうものかと言う



と、今日述べられたことで言うと、生命主義的なものなんです。そうすると、僕は知らなかったけれども、黒住教、天理教、大本教、霊友会、立正佼成会、創価学会、皆言っているじゃないかと、こういうことになるんだが。僕はそこで非常に違和感を持つのは、こういう宗教に対して違和感というか、欠点があると思うのはどこかと言うと、生命主義はいいし、平和主義も賛成、それは共通するんだが、まずもっと宇宙論をやってもらいたい。この人たちに。この宇宙がどういうふうビッグバンから始まって、そして形成されて、生命が創造されて、その中に人間が形成されていくのか。この過程をしっかりと追ってもらいたい。そうしたら生命主義、主義じゃなく、透明な事実になってしまう。宇宙は生きています。もうデカルトの時代じゃない。西洋哲学の時代じゃないとおっしゃったけれども、もうデカルトの時代じゃないんだから。宇宙論をやったら自ずとこれになる。

我々は137億年ですよ、宇宙の生命はね。その中で45億年地球の歴史があって、36億年、生命の歴史がある。それを全部通してみる。そうすると、その中に人間が生まれたんでしょう、その進化の過程において。そして宗教も作りだした。作りだしたから決定的な価値はないと言いませんよ。作りだしたのは作りだした理由があるんです。どうして生み出したのか。それはヤスパースが言ったように、精神革命の時代の大きな意味なのです。だけどヤスパースはやっぱり一つの文明圏から出た一つの見解だから、僕はちょっと違ったやり方でやろうと思っています。

宇宙の歴史の中で、僕の人生、ここからここまでですよ。長くないですよ。この宇宙のこの遺伝子の流れから生まれて、また宇宙の中に入っていくわけです。ですから、『葉っぱのフレディ』の話と根本的には同じなんです。葉っぱが育って木が実って、そして枯れてくるじゃないですか。そしてまた次の世代の肥やしになるじゃないですか。人間だって同じですよ。ただ人間は考えるからね。植物は考えないけれども、人間は考えるから、いろいろとがたがた言っているけれども、そんな小さい区別なんかは捨てたほうがいい。通底するものとおっしゃったが、それがあつたんですよ。それを発見すること。

そしてつまらない宗教戦争や殺し合い、何だかんだやって、キリスト教とイスラム教とががんやっている。ああいう馬鹿馬鹿しいことをこの地球上からなくすこと。これが哲学か宗教か僕は問わない。どっちでもいい、

そんなことはどっちでもいい。我々が幸福に正しく生きて、そして死ぬ時に意味があったと思えるようなことをしようじゃないですか。ただそれだけです。それが宗教か哲学かあるいは他の科学か、そんなことはどっちでもいい。

今の宇宙論、宇宙の歴史によると、宇宙は生きているんですよ。そうすると、具体的にはどういうことかという、キリスト教にはスーフィズムがありますよね。あれは、宇宙と一つになるという考えがあります。イスラムにも神秘主義があるんですよ。アナハックといって、私が真理だ、私が宇宙だという感覚があるんですよ。神道にももちろんそういう考え方があるし、新儒教、朱子学もそうなんだ。宇宙と一つになろうとしている。そういうことで、僕は、根本がつながっているように思うんですね。だからそういう点をはっきりと出していくべきだと思う。つまらない瑣末なことにこだわって、それこそ宗派別の喧嘩をいつまでも続けているんだと思う。こういうことは一つやらなきゃいけないんじゃないだろうか。これが今日お話を聞いていると、先生もそっちを目指している。僕もそういう方向を目指したいと思っているわけです。

**島藺** 先生は、日本の例えば新宗教団体とそこは違うんだとおっしゃいましたけれども。

**質問43** 僕は宗教団体と全然付き合っていません。創価学会ともどことも付き合っていませんから。

**島藺** 要するに科学と宗教は別のものだというのが……

**質問44** それはダメです、それは根本的にいけない。

**島藺** それは西洋の近代にできた考えですが、日本の宗教は、これは神道系の影響が強いところは特にそういうことがあると思いますが、それがなと思いますね。科学と宗教が一致するという考え方ですね。

**質問45** でも日本の科学というやつがふやふやしていますからね。これがダメなんですよ。日本の科学というのはまだはっきりとどういうものなのか、自然とどういう関係があるのか、これをもっと一方においてしっかりさせなきゃいけない。先生も、科学と宗教という問題に関心を持たれていると思います。もう一つ大きな問題が残るんですよ。それが対立であり、一方が、どちらかがどっちかを支配するんだという考え方は僕は間違いだと思っています。僕みたいに科学をやって、次にこういう問題に興味を持

ってきた人間にとっては、全然二つのことじゃないと思う。

ですから、最近の宇宙論を読むと、本当に宇宙論でも生命論でもそうなっていますよ。ただ、伝統的な科学者は気付いていない。専門家だから、全体として見ようとしな。そのために、それこそ小さいことにこだわって、がちゃがちゃやっている。全体的に見たらそうなっていると思う。だからデカルトの人間論もダメです。精神と物質だとかね。それから真理の「真」と信じる「信」の対立とかね。

**島菌** ただ、そういう一宗一派でこだわることは良くないことなんです、しかし伝統というところから見ると、そういう狭さを持っているからこそ伝統を保てるというか、そういう面があります。

**質問46** そうなんです。だからね、それは狭い伝統ですね。人間、宇宙という大きな伝統を考えましょうよ。そうしたらその中の本当に極端に小さなものですよ、言い争っているのは。

**司会** 司会者の特権で最後に一言お尋ねしたいんですが、最後に先生が趣味の世界だとおっしゃって一茶を出されました。浄土真宗では妙好人というのがありますよね。妙好人的な生き方というのに、私は非常に懂れているんですけども。先生は妙好人的な生き方について何かお考えがありましたらおっしゃっていただきたいんですけども。

**島菌** 妙好人というのはですね、妙好人伝をつくるために、真宗の説教者が自分たちの良いモデルを集めて回ったという特徴がある。どんな宗教的伝記にもそういうことがあると思いますが。そういう特徴を勘案しながらみると、相当共鳴できるんじゃないだろうかと思います。

一茶の良いところは、きれいな話ではないというのか、人間の悟りきれないところを露骨に出しているという点ですね。ずいぶんひがみっぼいんですよ、この人の話はね。「痩せがえる負けるな一茶」とかね、自分が痩せがえるになったつもりでしょう。ずいぶん図々しい話だと思っんですよ。

**質問47** 「やれ打つなハエが手をする足をする」。これも一茶でしょう。これ優しいじゃないですか。

**島菌** 結局自分がそうだとやっているわけですから、ひがみっぼいと言えどひがみっぼいんです。ひがみっぼいということは、自分が暴力の側に立つ、そういうことをよく自覚しているというか、いじめられる社会で生きているということを非常に真摯に受け止めているというか、それが非常に

現代的だと思うんですね。人間の嫌な面、弱い面というのをよく分かっている。だけど一緒に生きていこうじゃないかというふうなメッセージを持っている。そういう感じですね。それはおそらく「妙好人伝」の中にもあると思いますが、ありがたい話になっちゃうとちょっと違うかなと思います。

それが江戸時代の文学は、井原西鶴みたいに、徹底的に、何と言うんですか、エゴイズムの世界を丸出しにして、しかし共感を引き出そうとしている。そこが結構現代的なんじゃないかなという気がするんですね。

**質問48** 僕が今まで良いなと思っているのもずいぶん出されました。「露の世は露の世ながらさりながら」なんて、これ本当に良いですね。そして「是がまあつひの栖か雪五尺」も、本当に良いと思う。だけどね、本当にひがんでいるよね。人生に情熱持っていないんじゃない。せっかく生まれてきたんだから。

**司会** 予定した時間、ちょうどになりました。先生には本当にありがとうございました。

(編集者注：本稿は、平成20年6月21日に開催された、モラロジー研究所道徳科学研究センター主催の「公開講演会」の内容を収録したものである。)